TOTO 通信

2013年 新春号

Toward a Creative Architectural Scene

Special Feature / Faces of Walls

特集

壁の顔

TOTO 通信

Toward a Creative
Architectural Scene
Number 498
New Year 2013

の顔

建築の最重要な要素のひとつともいえる壁には、まだ、さまざまな可能性がありそうだ。新たな壁、壁そのものの存在を問うてくる壁もまたそこにあるようだ。壁の主張、表現の可能性を探って特集を組んだ。

Contents

特集1／インタビュー **見えない向こう側へ** 4
演劇的空間を生む壁の発想
「Small Atelier」
設計／五十嵐 淳

特集2／インタビュー **体験をつくり出す壁** 12
そのアプローチを聞く
「比叡平の住居」
設計／島田 陽

特集3／ケーススタディ **ガラスを見立てて** 26
「翠ケ丘の住宅」
設計／藤田雄介

特集4／ケーススタディ **家具化した壁** 34
「目黒本町の住宅」
設計／鈴野浩一 + 禿 真哉

シリーズ
旅のバスルーム 85 ウマ・パロ(ブータン・パロ) 文・スケッチ／浦 一也 42
現代住宅併走 21 山口文象の「自邸」 文／藤森照信 44
最新水まわり物語 31 東京スカイツリー® 50
最新水まわり物語 32 パレスホテル東京 54
地域に生きる会社 58 藤島建設 58
TOTOギャラリー間で展覧会をします 第13回ヴェネチア・ビエンナーレ 国際建築展 日本館帰国展 「ここに、建築は、可能か」 60
news file 62

『TOTO通信』をインターネットでご覧いただけます

TOTO Web Site
www.toto.co.jp

表紙写真／「Small Atelier」(4〜11ページ)の室内。
写真／五十嵐淳建築設計事務所

編集制作／中原大久保坂口編集室
デザイン／岡本一宣デザイン事務所
印刷／ゼネラルアサヒ

Chapter 3 Case Study

Chapter 4 Case Study

特集 壁

Special Feature
"Faces of Walls"

Chapter 1 Interview

Chapter 2 Interview

「Small Atelier」（4〜11ページ）の室内。扉を開ける角度によって、円形の壁にまわる光が微妙に変化していく。
写真／阿野太一

設計　五十嵐 淳

建物名　「Small Atelier」

演劇的空間を生む壁の発想

インタビュー・まとめ／伊藤公文　写真／阿野太一

向こう側へ

個人住宅の離れとして建てられたアトリエ。絵画のための空間であり、フラメンコの練習場、お披露目会のための場でもある。ティアドロップ型の平面をもつアトリエ部分に、トイレ、給湯室、納戸など、機能の異なる小部屋が取り付くという構成。南側壁面に等間隔で並ぶ6つの扉は、5つの小部屋＋玄関扉。右手の鏡が、空間を複雑に増幅させる。

Igarashi Jun

見えない

同じ姿形の6つの扉が並ぶ、弧を描く壁。抽象度が極限まで高められたその壁の「こちら側」には、ある種の物語性を感じる空間が生まれている。一方、壁の「向こう側」には、目には見えないけれども、扉の外に広がる想像上の場が生まれている。まさに演劇空間を意識化したものとも見える。虚構性を強調する巨大な鏡もまた演劇的操作だろう。新鮮な物理的空間と心理的空間を同時に出現させる壁。床面積わずか10坪ほどの「Small Atelier」につくられた壁は、あらためて壁の意味を問いかけるように立っている。設計者・五十嵐 淳さんに、プランニングと壁の意図を聞いた。

給湯室など、アトリエに付随する小部屋の天井高は1,810〜2,400㎜。写真奥のアトリエの天井高（梁下）は3,000㎜。

→ 給湯室から見る

→ 扉の側面

アトリエから採光室を見たところ。扉は、厚さ15㎜と20㎜のシナランバーを合わせたもので、15㎜厚の部分だけが壁に覆いかぶさるようにして、薄い扉が壁の前にスッと立つように見せている（左上の写真参照）。また、特殊なヒンジの採用により、扉は180度開く（11ページ詳細図参照）。ドアノブはアルミ削り出し。採光室は、内壁、床、天井、扉内側ともに仕上げはアルミ板。真南からの太陽光を乱反射させながらアトリエに導く。扉の開き具合で調光する。

事情があって、「Small Atelier」を見ることはかなわなかった。以下は、五十嵐淳さんとの電話インタビューにもとづく一問一答。

―― 今回のテーマは「壁」です。まず最初に仕事の依頼の経緯からうかがわせてください。

五十嵐 淳 木造の2階建てアパートが立っていたのですが、焼失してしまいました。その跡地の計画です。ご主人の趣味が絵を描くことなので、そのための小さなアトリエを建てたいとの要望でした。

―― 実際にはフラメンコの練習場でもある。

五十嵐 はじめはあくまでも絵画のアトリエとしてスタートしたのですが、

アトリエ西側を見る。木造（枠組壁工法）の平屋で、構造強度を確保するために、同じ成（235㎜）の梁をスパンの長さに応じて配置密度を変えている。壁は珪藻土塗り。床はコンクリート金ゴテ仕上げ防塵塗装（クリア）。

↑ 扉と鏡

ある程度進んだ段階になって夫人からフラメンコの教室として使いたいという要望が出てきました。

―― 突然の要望に、ずいぶんとまどいもあったかと思いますが。

五十嵐 確かに180度異なるといえる要望でした。片や静謐で安定した雰囲気をもつ空間を、片や激しい音と動きを受け入れる空間を必要とする。それに絵はひとりで描き、他人が介在しないので私的な空間ですが、フラメンコは数人がやってきて練習し、お披露目の会も行うので、規模は小さいとはいえ公的な空間です。でも、そうした矛盾と対立を孕んだ状態を止揚しようとすることが、案を創造的に発展させる契機になったと考えています。

円弧が奥行きをあいまいにし光をまわす

―― それほど広くはない敷地の真ん中に立っています。

五十嵐 駐車場を確保し、延焼線をかわし、かつ500万円という予算などから、配置と規模はほぼ自動的に決まったといえます。

―― 五十嵐さんとしては珍しく、有機的というか、不思議な曲面をもったプランですね。

五十嵐 約10坪の小さな規模なので、狭さを直接に感じないようにするにはどうしたらよいかが、つねに頭にあって、奥行きをあいまいにしようと、角のない建築をスタディしました。それと、絵を描くのに適切な環境として、北側からの安定した自然光をやわらかく部屋のすみずみにまわしたいと思いました。また、普段はせいぜい数人が使うだけですが、フラメンコの披露会では30人くらい収容するので、それをなんとか満たす必要がありました。ですからできるだけ望ましい状態を構築しようと考えてのことで、円弧を用いた形はその結果として出てきたものです。

―― 天井高（梁下）3mの本体から天井高1810㎜の小さな部屋が5つ飛び出した格好になっていて、その内のひとつが採光室となっていますが、その役割は。

五十嵐 北側上部からの自然光を主とするとしても、必要に応じて制御できる補助光線があったほうがよいという判断です。扉を開く角度によって南からの強い光線を適度に抑えながら室内に導き入れることができます。

―― その試みはうまく機能しましたか。

五十嵐 おおむね想定どおりでしたが、北側開口からの自然光が予想より

やや強かったですね。もう少し抑えておけば、採光室の効用が高まったのではないかと思っています。

―― それにしても5つの小さな箱が本体から飛び出しているのは特異なプランです。

五十嵐 はじめは主となる空間を内側に置き、その周囲に外部との緩衝空間としてトイレ、納戸、給湯室、出入り口などを配するというスタディをしていたのですが、規模やコストから難しく、結果として主空間を整形とし、補助的な従空間を外側にアタッチメントとして配する形に落ち着きました。

壁の意味を拡張する発想とディテール

―― 内部では、曲面の壁に6つの同じ形の扉が並んでいます。機能に応じて形を変えようとは思われませんでしたか。

五十嵐 同じ形にすることで空間の抽象度が高まり、私がテーマにしている「見えない向こう側」が現前することになると思いました。

―― 「見えない向こう側」という考え方を、もう少し説明していただけますか。

五十嵐 そうですね、壁の意味の拡張とでもいえるでしょうか。もちろん壁は空間を遮断する機能をもっていますが、それだけではなく、こちら側の空間に身を置きながら向こう側にある空間を推しはかり、感じとらせる装置として働きます。そのことによって内側の空間が守られていて、安定した状態として認識できるようになるとともに、空間に心理的なふくらみがもたらされます。

―― 壁で四周を囲われたときの閉塞感が薄らぐということでしょうか。

五十嵐 そうですね。壁の向こう側に、見えないけれどもなんらかの空間が広がっていると認識できることが重要です。

―― なるほど。それで扉を同じ形にしているんですね。

五十嵐 形だけでなく扉の納まりにも配慮しています。普通は三方枠を付け、その内に扉を納めますが、ここでは枠を見せず、扉が壁の前に覆いかぶさっているようなディテールとしています。

見えがかり厚さ15㎜の薄い扉が、壁の前面に静かに佇んでいるような状態をつくっているんです。

また、この納まりだと通常は扉が90度しか開かないところを、「ドリルインヒンジ」という特殊なヒンジを使って扉が180度開くようにしていますが（11ページ詳細図参照）、それも壁の開口に〝蓋をする〟という考え方に適うものとして選択しています。

―― 扉が壁と同化しないようにしたいということですか。

五十嵐 そうです。扉が壁の　部であるのではなく、自立した存在であることを明示することで、扉の向こう、すなわち壁の向こう側の空間が強く想起されると思うんです。

―― 最後にひとつ、この壁の外側、外壁はアスファルトルーフィングの下見板張りとなっています。あまり見かけませんが。

五十嵐 曲率がかなり強いのでやわらかな素材、もしくは小さなピースの素材が必要でした。コストや耐候性を考え、それとモノコックな姿に見せたいことなどからアスファルトルーフィングを選択しました。

―― ありがとうございました。

壁の向こう側に、
見えないけれども
なんらかの空間が
広がっている

Igarashi Jun

玄関は、内開きと外開きの2重扉。外壁はアスファルトルーフィングで、遠近感と垂直方向の意識をふくらませるために、上に行くにつれて幅を広げている。

↑ 玄関

↓ 北東側外観

札幌市内の住宅地に立つ小さな黒いアトリエ。右端の開口部が北側道路に面し、左手（南側）奥に母屋があるという塀のない敷地。建物のまわりを駐車場として使っている。

北に向かって絞り込まれる平面。突き当たり開口部には、施主所有の両開き戸を再利用している。上部はフィックス窓。

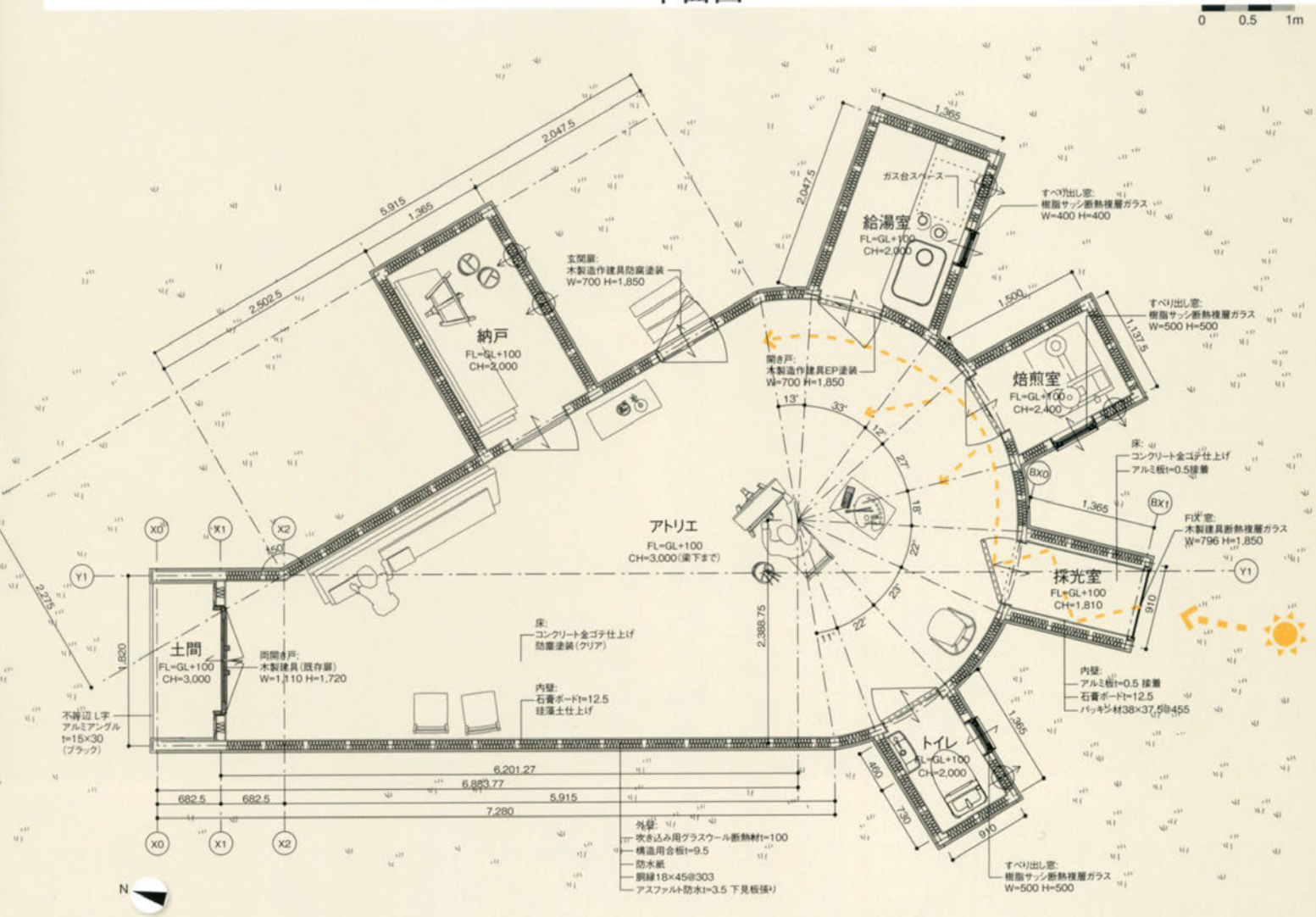
↑ 北側を見る

↓ 南側を見る

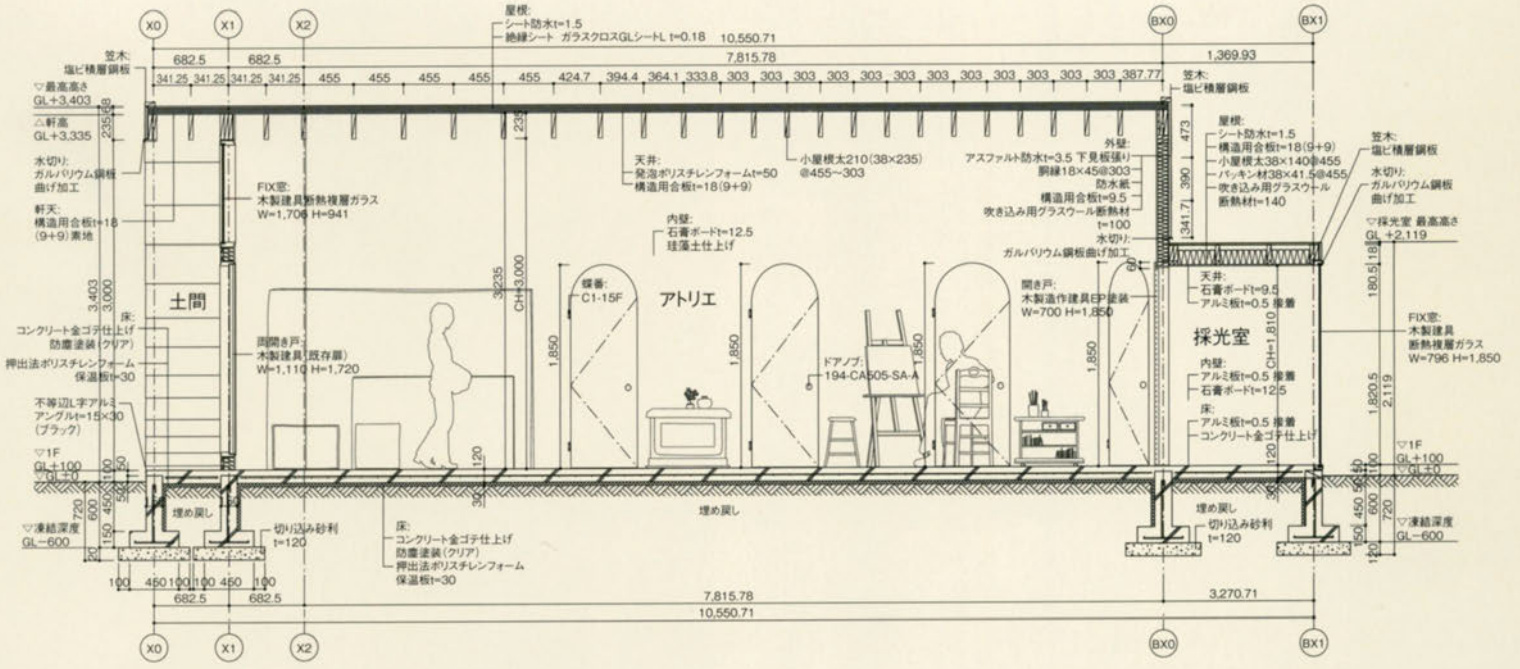
6つの扉は、左から、納戸、玄関、給湯室、焙煎室、採光室、トイレ。すべて同じ扉を等間隔に並べることで空間の抽象度が高められ、「見えない向こう側」が現前することになる。

1/70

平面図


0 0.5 1m
納戸
FL=GL+100
CH=2,000
玄関扉:
木製造作建具防腐塗装
W=700 H=1,850
給湯室
FL=GL+100
CH=2,000
ガス台スペース
すべり出し窓:
樹脂サッシ断熱複層ガラス
W=400 H=400
焙煎室
FL=GL+100
CH=2,400
すべり出し窓:
樹脂サッシ断熱複層ガラス
W=500 H=500
開き戸:
木製造作建具EP塗装
W=700 H=1,850
アトリエ
FL=GL+100
CH=3,000(梁下まで)
採光室
FL=GL+100
CH=1,810
FIX窓:
木製建具断熱複層ガラス
W=796 H=1,850
床:
コンクリート金ゴテ仕上げ
アルミ板t=0.5接着
土間
FL=GL+100
CH=3,000
両開き戸:
木製建具(既存扉)
W=1,110 H=1,720
不等辺L字
アルミアングル
t=15×30
(ブラック)
床:
コンクリート金ゴテ仕上げ
防塵塗装(クリア)
内壁:
石膏ボードt=12.5
珪藻土仕上げ
内壁:
アルミ板t=0.5 接着
石膏ボードt=12.5
パッキン材38×37.5@455
トイレ
FL=GL+100
CH=2,000
外壁:
吹き込み用グラスウール断熱材t=100
構造用合板t=9.5
防水紙
胴縁18×45@303
アスファルト防水t=3.5 下見板張り
すべり出し窓:
樹脂サッシ断熱複層ガラス
W=500 H=500
6,201.27
6,883.77
5,915
7,280
682.5
682.5
N

断面図


屋根:
シート防水t=1.5
断熱シート ガラスクロスGLシートL t=0.18
笠木:
塩ビ積層鋼板
▽最高高さ
GL+3,403
△軒高
GL+3,335
水切り:
ガルバリウム鋼板
曲げ加工
軒天:
構造用合板t=18
(9+9)素地
FIX窓:
木製建具断熱複層ガラス
W=1,706 H=941
土間
床:
コンクリート金ゴテ仕上げ
防塵塗装(クリア)
押出法ポリスチレンフォーム
保温板t=30
不等辺L字アルミ
アングルt=15×30
(ブラック)
両開き戸:
木製建具(既存扉)
W=1,110 H=720
▽1F
GL+100
▽GL±0
▽凍結深度
GL−600
埋め戻し
切り込み砂利
t=120
床:
コンクリート金ゴテ仕上げ
防塵塗装(クリア)
押出法ポリスチレンフォーム
保温板t=30
天井:
発泡ポリスチレンフォームt=50
構造用合板t=18(9+9)
内壁:
石膏ボードt=12.5
珪藻土仕上げ
蝶番:
C1-15F
アトリエ
小屋根太210(38×235)
@455〜303
ドアノブ:
194-CA505-SA-A
外壁:
アスファルト防水t=3.5 下見板張り
胴縁18×45@303
防水紙
構造用合板t=9.5
吹き込み用グラスウール断熱材
t=100
水切り:
ガルバリウム鋼板曲げ加工
開き戸:
木製造作建具EP塗装
W=700 H=1,850
屋根:
シート防水t=1.5
構造用合板t=18(9+9)
小屋根太38×140@455
パッキン材38×41.5@455
吹き込み用グラスウール
断熱材t=140
天井:
石膏ボードt=9.5
アルミ板t=0.5 接着
採光室
内壁:
アルミ板t=0.5 接着
石膏ボードt=12.5
床:
アルミ板t=0.5 接着
コンクリート金ゴテ仕上げ
▽採光室 最高高さ
GL+2,119
FIX窓:
木製建具
断熱複層ガラス
W=796 H=1,850
▽1F
GL+100
▽GL±0
▽凍結深度
GL−600
埋め戻し
切り込み砂利
t=120
7,815.78
10,550.71
1,369.93
3,270.71

西側俯瞰。右の建物は母屋。

建築概要

所在地	北海道札幌市
主要用途	離れ(アトリエ)
設計	五十嵐淳／五十嵐淳建築設計
構造設計	長谷川大輔構造計画事務所
施工	赤坂建築
敷地面積	395.71㎡
建築面積	40.35㎡
延床面積	39.11㎡
階数	地上1階
構造	木造(枠組壁工法)
設計期間	2009年6月～2010年3月
施工期間	2010年4月～7月

おもな外部仕上げ

屋根	シート防水t=1.5㎜
外壁	アスファルト防水t=3.5㎜
	下見板張り
開口部	木製建具　樹脂サッシ

おもな内部仕上げ

アトリエ	
床	コンクリート金ゴテ仕上げ
	防塵塗装(クリア)
壁	PBt=12.5㎜珪藻土仕上げ
天井	針葉樹合板t=18㎜
	(9㎜+9㎜の2枚張り)素地
納戸　給湯室　焙煎室　トイレ	
床	コンクリート金ゴテ仕上げ
	防塵塗装(クリア)
壁	PBt=12.5㎜EP
天井	PBt=9.5㎜EP
採光室	
床	コンクリート金ゴテ仕上げ
	アルミ板t=0.5㎜接着
壁	PBt=12.5㎜
	アルミ板t=0.5㎜接着
天井	PBt=9.5㎜
	アルミ板t=0.5㎜接着

五十嵐 淳
Igarashi Jun

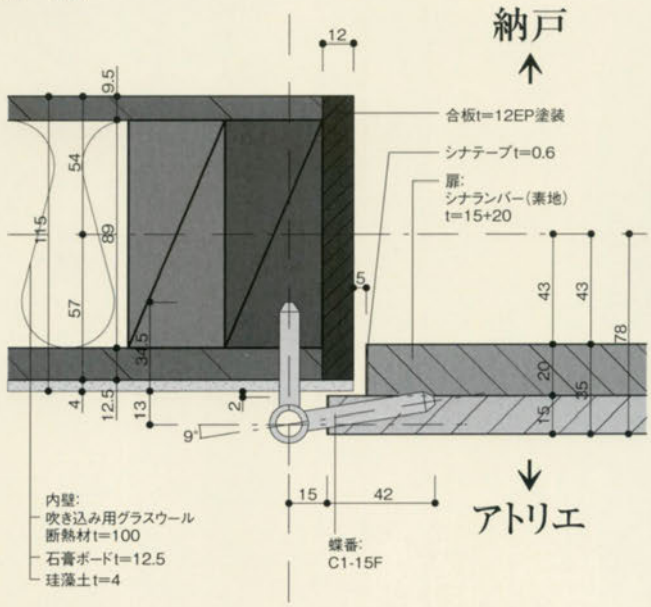
いがらし　じゅん／1970年北海道生まれ。90年北海道中央工学院専門学校卒業。91～95年BEN建築設計事務所。97年五十嵐淳建築設計設立。現在、名古屋工業大学非常勤講師。おもな作品＝「矩形の森」(2000)、「風の輪」(03)、「原野の回廊」(06)、「光の矩形」(07)、「間の門」(08)、「House M」(09)。おもな受賞＝03年吉岡賞、05年BARBARA CAPPOCHINビエンナーレ国際建築賞グランプリ（イタリア）、10年JIA新人賞。

ポートレート写真(5、8、11ページ)／傍島利浩

1/3

扉部分詳細図

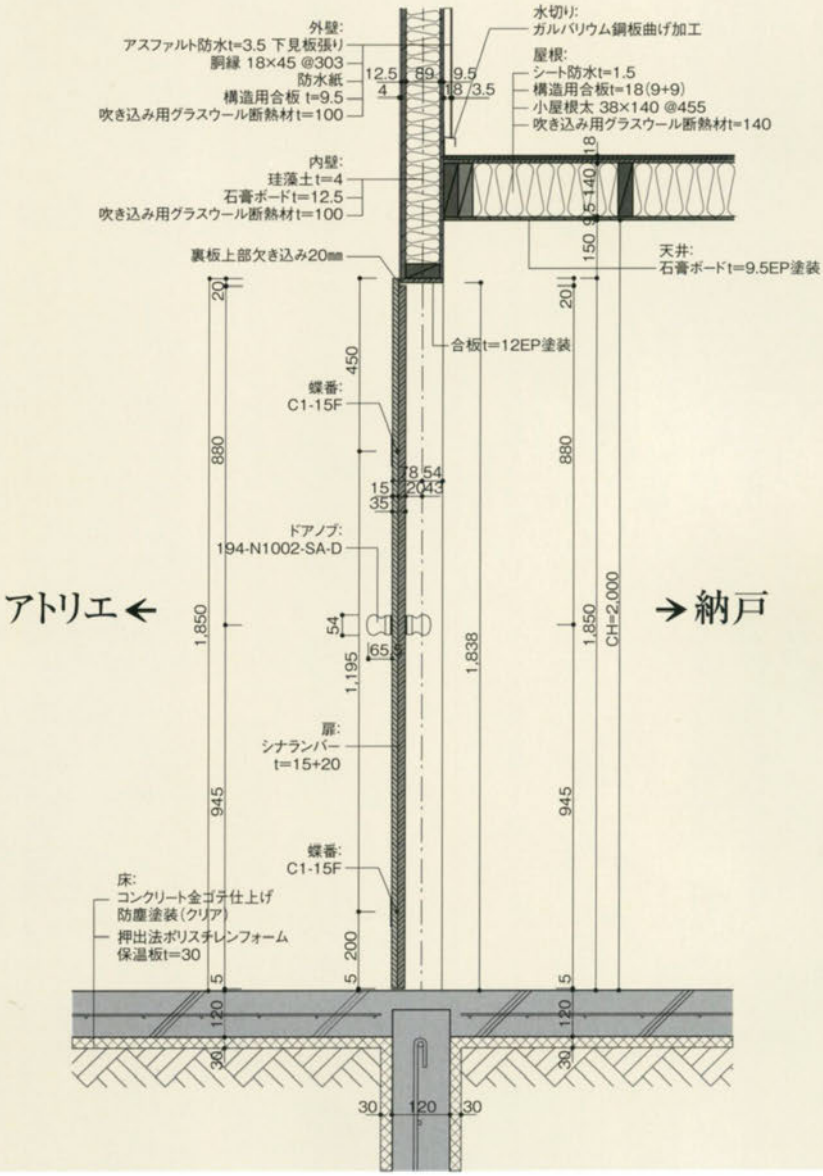
0　2.5　5cm



1/20

納戸扉詳細図

0　25　50cm



設計　島田 陽

建物名　「比叡平の住居」

たとえば、"斜めの壁"が印象的な「比叡平の住居」。建築家の島田陽さんが、どのように空間にアプローチし、形にしていったのか。そのなかで壁は、どういう意味をもち、どのように建築にかかわっているのか。それを探るために、京都と滋賀の境、比叡山を訪ねた。

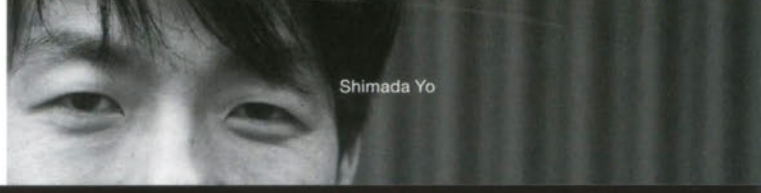
インタビュー・まとめ／豊田正弘　写真／傍島利浩（ポートレート+「比叡平の住居」）

くり出す壁

そのアプローチを聞く

※写真の番号は、撮影位置と方向を示す番号として平面図（24ページ）に記入してあります。

1



体験をつ

①「比叡平の住居」。階段上部から東側を見る。斜めの壁の左側は寝室。②2階の寝室から南方向を見通す。壁を傾けて斜めに空間を分割することで、「丘のような床」と「屋根のような天井」が現れ、大きな家型（小屋）の中に小さな家型が組み合わされたような空間となっている。写真正面、高さ2mの斜め壁の奥はゲストルーム。空間としては一体だが、直接行き来することはできない。

3つの家型による風景

―― 今回の特集では、あえて建築の「部分」のひとつである「壁」を取り上げます。建築要素のひとつを新しい視点から見ることで、空間全体も新しくなるのではないかと考えてのことです。この「比叡平の住居」(以下、「比叡平」)をメインにしながら、島田さんが空間をつくっていく発想から実際まで、壁と空間との関係をうかがいます。

まず、「比叡平」を分棟型の配置としたのはなぜでしょうか。

島田 陽 建て主は美術作家なので、アトリエをつくるという前提がありました。ローコストの計画(総工費1960万円)ですから、住宅と緒にまとめてしまうほうが、外壁が少なくなって合理的ではある。ただ、住宅とアトリエとほかのスペースを全部まとめたボリュームをつくるのは、この住宅地にはインパクトが強すぎます。建て主もアトリエと住宅は分かれているほうが気分が切り替わっていいというので、まずそのふたつを分けました。

それから、アトリエ自体が住宅地においては異物なので、人が受け入れやすいようにするにはどうしようかと考えました。それともうひとつ、この地域は勾配屋根が義務付けられているという条件がありました。街並みを眺めると、条件をひねって無理にフラットな屋根に見せる必要もない。そんなことで家型に至ったんですね。家型をふたつ並べる。また、建て主の作品のテーマに「複製」という考え方があったので、普通の家を複製して中身は違う、リノベーションのような新築はどうかと、事務所内では冗談で話したりしていました。それで結局、両親のためのスペース(多目的室)も分けて、3つにしようと。

家型がいくつかあると、それだけで風景がつくり出せますよね。3つあれば、もう、ひとつの風景になる。ある程度敷地が広い場合には、非常にいい答えだと思います。この街並みに後から参加しているわけですけれど、3つ同時にできるとあまり違和感が生じないかと。

ですから、分けることと家型を選択することとは同時に決定しました。ローコストで積雪もあるため、あまり複雑な屋根仕舞いにはしたくない。それで、とても単純な家型を選択しています。

とはいえ、大きなものが3つ並ぶのもインパクトが強すぎるので、なるべく小さく見えるようにコントロールしようと考えました。みなさんの心の中にある、いわゆる「小屋」を拡大してつくっているんですね。窓の位置を高くして、1、2階をまたぐ窓としたりしている。イメージのなかの窓と建物の比率によって全体をギュッと小さく見せる。それは、単に小さく見えるからおもしろいというより、自分の状態によって感じ方自体が変わるのがおもしろいと思ったんです。じつは上棟時には、「ボリュームが大きすぎる。失敗した」とショックを受けました。それは窓が付いてなくて、記号の操作が脳を経由していないからだったんですね。軸組だけで見ると大きすぎるけれど、窓が付くと印象が変わりました。

―― 絵に描かれるような「小屋」は、窓付きでイメージされているわけですか。

島田 どうもそのようですね。平屋の1・7倍くらいの大きさにしましたが、1・3〜1・5倍くらいにしか見えない。

―― 屋根は矩勾配に近いですね。

島田 はい、頂部で100度開いています。模型で検討して、90度だとライズが高すぎるので、ちょっと下げました。

↑ 南西側外観

↑ 東側外観

③右が住居棟、左がアトリエ棟。④奥の白い小屋は両親のスペースで、構造上は住居棟と一体だが、3棟の小屋に見える。

斜めの壁が生み出す余白

―― この住居棟を特徴付けている、斜めの壁についてうかがいます。

島田 当初、住居棟は「平屋+ロフト」程度で依頼されたんですが、2回目の打ち合わせのとき、「2階がもうちょっとほしい。下の階と切れているほうがいい」という話が出てきました。でも外のボリュームを大きくしたくなかったので、それは変えない。ふつうに垂直に壁を立ててしまうと、ロフト部分は窮屈な狭い場所になってしまうので、壁を倒してみたら、結局、天井と壁の中間みたいなもの、床と壁の中間みたいなものになった。そうすると、1階にとっても2階にとっても、お互いに〝自分のもの〟と思えるような、いい勾配ができました。家型というのは決めていたので、家型の天井面を複製してこっちにもってきて、さらに複製してもってきてという操作を繰り返して、こういう空間ができたという感じですね。

同時にここでは、あまり収納を用意できないことはわかっていました。

―― つくり込んでいないというか、造り付けの家具や装備はとても少ない印象を受けます。

島田 ローコストでもあるし、建て主はものづくりのプロフェッショナルなので、「後からつくりたい」という話がありました。ダイニングテーブル脇の棚もそうですが、後でいくらでもつくることができる。建て主とのコンセンサスとして、お互いに後で手が出せるようにしておこうという感じだったんですね。すると、やがて室内にパーッとものがあふれてきます。

⑤ボリュームを住宅地の街並みになじませるために、3つの相似形の家型に分割した。中央の住居棟は、窓を大きくし、位置も高くして、誰もが思い浮かべる小屋のプロポーションを取り入れ、イメージのなかの窓と建物の比率によって、実際よりも小さく見えるようにしている。そのため左端の窓は、1、2階をまたいで設けられている。

↑ 北東側外観

↓ 南東側外観

⑥京都と滋賀の境、比叡山の中腹にある敷地は、京都中心部から車で20分。左手のアトリエは、高圧木毛セメント板を構造、断熱、防火を兼ねて構造体に張り付け、それをポリカーボネイト波板で覆うだけの簡素なつくりとなっている。

その状態を美しく見せるには、勾配のある大きな天井、2階では勾配のある大きな床面があって、〝ものを置けない場所〟ができるのは非常にいいと思いました。余白みたいなものが住宅の中にあって、ずっと手がつけられない、竣工時からほとんど変わらない場所になる。

―― 室内はスケールが変わって見えますね。遠くから見て小さいと思えた小屋が、近寄るとわりと大きくて、でも中に入ると、もうひとつ小さくつくられている。一重に裏切られるような感覚です。

島田 そうですね。そのような状態を目指しています。さらに、中に入ると見覚えのある屋根勾配みたいなものが出てくるので、その上が外部のようにも感じられます。ところがその勾配面に開口部があって、そこに入っていける。ここでもまた裏切られるわけです。入るとその上の勾配面にも開口部、じつはトップライトがあります。小さな住宅ですが、そういう操作によってどこまでも広がっていく。2階の上にもまだあるんじゃない？というようなことを感じてもらえればなあと。

―― 1階の天井――斜め壁の開口がトップライトに見えるというのは、正方形で、フレームを見せないことにもよるのでしょうか。

島田 はい、どうやったら効果が出るかというのはすごく考えますね。見上げたときに、ガラスの面は一番奥にあるべきだとか。

―― この斜めの壁は、どんなときに思いつくのですか。その大きさは模型で確認するのでしょうか。

島田 外側のボリュームは配置から決めていたので、それをどう内側で切り取るかを試行錯誤していました。模型と図面とは同時に進めて、スケッチで確認したり……。ある瞬間、壁を倒してみたら、非常にいい大きさになった。ズバッと一気に全部ができたという感じです。この倒し方によって、空間のくびれみたいな、奥行きのようなものが複雑に出てきて、いいんじゃないかと。これができてから、ほとんど変わっていないです。

単純なルールで多様な場をつくる

―― 以前、雑誌で「結晶のように」と書かれていましたが、結晶化の条件には、プロポーション、素材、色などがありますよね。

島田 そうですね。多様な場所をつくりたいのですが、フォールディング・アーキテクチャーのようにたくさん手を下したくない。この住宅の場合、ほとんど2手くらいです。壁を倒して、合致させて……。僕がやりたいのは、結晶と同じように、単純なルールによって複雑な場所をつくりたいんですね。

―― 階段を上がっていくと、風景が反転するような感じがある。そして

⑦ダイニングから1階を見通す。壁を斜めに倒すことで「空間のくびれのようなものが出てきた」と島田さんは言う。

↑ ダイニングから見る

↓ 玄関1から見る

⑧玄関1を入った瞬間は、正面に家型の天井が見えるので、平屋と間違う人もいるそうだ。

階段と寝室入り口を見る

⑨位置的にも視覚的にも住居棟の中心となる階段。2階の寝室入り口は、傾斜面に設けるので、段ボール製の簡易モックアップをつくり、実寸で位置と大きさを検討したという。その結果、1,200㎜角の開口となった。壁の厚さは150㎜。

屋根に寝転びたくなるような、身体性を感じます。

島田　繰り返しになりますが、この家のボリューム自体が、人の認識や知覚を操作しています。同時に内部でも、勾配の天井面を抜けていくと、屋根の上に出たように感じる。その上にまた、同じ勾配で同じ大きさのトップライトのある屋根がかかっている。それが反転を続ける印象を与えます。

大学2年のときにセルフビルドでつくったものも、階段を上がり下りしてほかの層に入っていき、そこでまた別の体験をするというものでした。そういう、人間が身体を伴って移動すると、移動自体が何か知覚に影響を与えるというのがおもしろいと思っているんでしょうね。それを積極的に意識することはなくて、できてみたらそうだったという感じです。体験をつくり出したい。その空間ならではの体験ができるというところまで考えつづけています。

――　島田さんが改修の設計をされた別の住宅、「塩屋町の住居」(以下、「塩屋町」、23ページ参照)では、階段室をひとつつくることで全部を解決している。これも単純なルールによって、その空間体験をつくっていますね。壁の内側と外側という移動に伴って。

島田　そうですね。「塩屋町」の建て主からは最初に、「何がいやといって、階段が狭いのがいや」という話を聞きました。では階段室を補修しようということから、それが構造補強にもなって、なおかつすべての機能を再編成できればと。階段が動線のノードになれば、ほかの動線空間がすごく減るからいいかなと思っていました。先ほどの、裏と表の反転みたいなことがとてもおもしろい。なんということのない普通の住宅に、真っ白な抽象を入れると、具象面というか、年月を経た軀体や、そのままでは無様だった照明器具が際立ってくる。美術館に置かれると何もかもが輝いて見えるという効果がありますが、それを住宅に取り入れているわけです。

「比叡平」の場合は、収納はない、ものがいろいろ出てくる。それを美しく感じさせるために、ギャラリーと同じ構成にしたんです。床をグレーのコンクリートにして、壁を白くした。建て主の仕事の根幹には、美術館やギャラリーといった空間で何をどう見せるかというのがあります。だから、うまく使ってくれるんじゃないかと思いました。きれいに住んでくれていますよね。

――　正方形の窓や室内の小さな開口も印象的です。

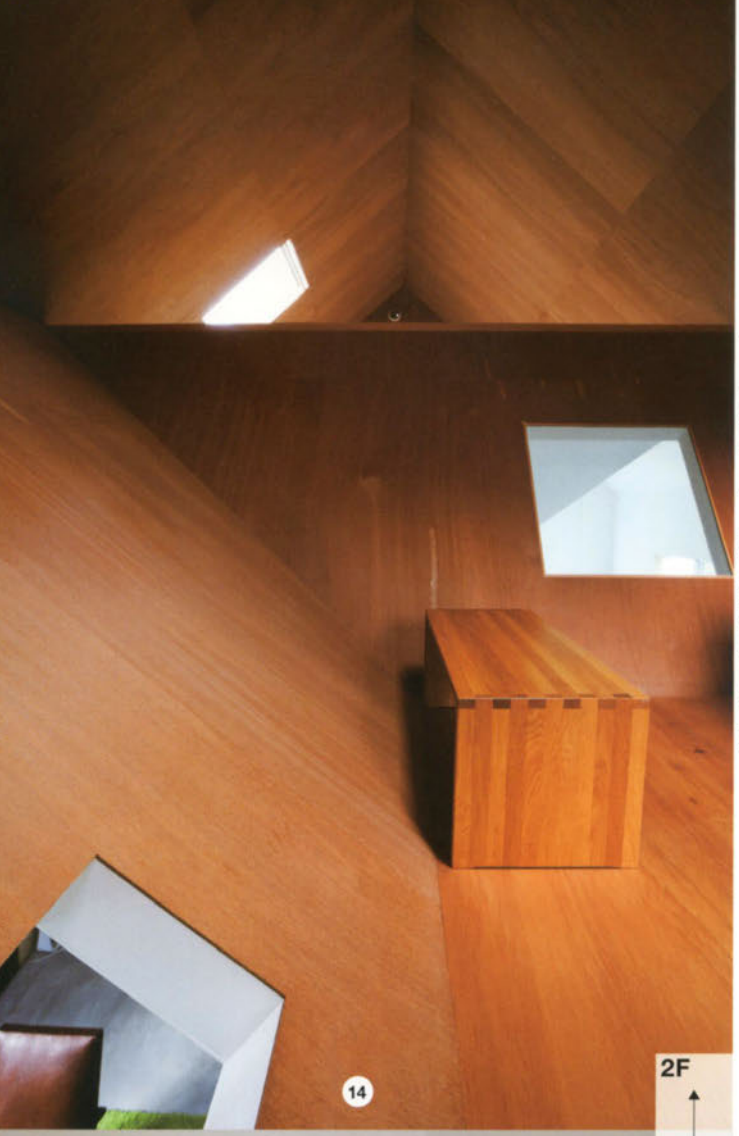
島田　同じ正方形ですが、キッチン北側の窓はフィックスで、額縁としてつくっています。ダイニング東側の窓は、外部からの体験のようなものを

← 2階寝室出入り口から1階を見る

2F
1F

⑩2階の内部仕上げはラワン合板。⑪1階の天井、壁の仕上げは白ペイント。斜めの壁を介する風景の反転は、身体の移動によるその空間ならではの体験を意図したものだという。

← 1階リビングから2階寝室出入り口を見る



← 2階ゲストルームから寝室方向を見る

⑫ダイニングを見下ろす寝室の窓は、フィックスガラス750㎜角。

→ 2階寝室の窓から1階ダイニングを見る

⑭2階ゲストルームへは、1階ワークスペースの梯子で上がる。⑮リビング。左上の小さな開口部は素通しで、猫の出入り口にもなる（写真⑭の左手前の開口部）。1階床は深夜電力で基礎に蓄熱する床暖房を設置（アトリエも同様）。

← 1階リビング

⑬上の写真の見返しでダイニングから見上げると、天窓のさらに上に天窓があるような不思議な奥行きを感じる。

→ 1階ダイニングから2階寝室の窓を見る

アトリエ棟

⑯入り口から見た室内。⑰美術作家である建て主の手による、道具の壁面収納。

意識して、引き違いのアルミサッシにしたり、使い分けています。

人の認識を操作する

――アトリエ棟は壁のつくり方も違いますね。

島田　この住居棟は抽象的な壁ですが、アトリエ棟は、ブルータルというか、素材そのものがバーンと出てくるような、率直な壁みたいなものをつくっています。要するに、2種類しか材料がない。構造体の外側に、断熱と防火と構造を兼ねて高圧木毛セメント板が張ってあり、その外に透光性のある防水層としてポリカーボネイト波板が取り付けてある。コーナーも当然ポリカだろうというので、ポリカの役物で挟み込んでいる。ほぼ同じ仕組みで、屋根もやっています。木毛セメント板を内側から取りはずすと、採光面がつくれるわけです。

アトリエの使い方がどんどん変わるという話は聞いていました。実際、竣工して1年後くらいにスタッフが来ることになって、もうちょっと断熱性能があったほうがいいということで断熱材を入れたり。あと、壁を立てたり、いろいろとされています。

「山崎町の住居」(以下、「山崎町」、23ページ参照)でも、アトリエ棟の構成に近い壁をつくっています。ライトルームと称して、構造材の外側にポリカーボネイト波板、内側にツインカーボを張り、透光性のある壁から採光している。もうひとつのサニタリーは、そのあいだに透光性のある断熱材を入れて、ぼんやり光る壁みたいなものをつくりました。そこは山間部の集落ですが、窪地なので「比叡平」よりも日照時間が少ない。明るい住宅がほしいという要望があって、このような素材を使っています。

――「山崎町」では3つの小屋が立ち上がっていますが、建物全体は掘り下げられて腰壁がまわっています。囲まれて安心できる感じを受けました。

島田　ええ、掘り下げたことで、屋根が地面に近くなって上を庭のように使えるのと同時に、半分地面に埋まった、非常にどっしりした安心感のある場所ができています。天井高を2300㎜とやや抑えた、広い空間です。家型というのは天井面が高くて伸びやかな場所になりますから、対比的につくっているわけです。先ほども言ったように、しっとりとした暗がりのある、半地下で広々とした場所から、光に囲まれた伸びやかな場所に、上がったり下りたりという体験自体がおもしろいのではないか。住宅の中にそういうのがあるといいなと思っています。

――ライトルームとサニタリーの床は約90㎜という薄さですね。

⑱アトリエ2階から見る。ポリカーボネイトの壁越しに住居棟のシルエット。

島田　そこは、ある層をスッと抜けるような感じにしたかった。逆にゲストルームの床は分厚くて、くぐり抜けていくように……。いろんな対比で、薄いところと厚いところをつくっています。

――「山崎町」の設計趣旨説明文に、「参照要素として誤用」し、「一重の意味」をもたせる、とあります。具体的にはどういうことですか。

島田　たとえば、開口の上に洗面台がかかっていて、それが手すりにもなっています。いかにも手すりというものをまわすと、それが体験のじゃまをして、建築が純粋ではなくなるという意識があるんです。そこで、何かと置き換えをします。「比叡平」でもそうですが、住人がいろいろ持ち込んできたものが、これはたまたま椅子みたいに使っているけれど、椅子ではない使い方につながる。そういう、家具たちが自由にふるまえるような、ある可能性を感じさせられるんじゃないか。

たとえば造り付け家具にしても、「よけいなものを全部しまい込む」という建築家のメッセージを発しているものって、よくありますよね。建築に似せた家具のような。そうではなくて、それが家具であって、建築と混ぜ合わされているような状態をつくりたい。家具がその空間に入ってきやすくなるというか、入ってきていきいきとした状態をつくれるのではないかという期待をしています。それも、認識を操作したいという、僕の願望の発露なんですけれど。

ものを受け入れる室内風景

島田　最近竣工した住宅では、階段と洗濯機入れと壁とが一緒になった家具のようなものをつくっています。建築と分離されて、置かれているように見える。その階段の上にはテーブルがかかっている。またリビングでは、ソファに上がって、そこからさらに引き出しに上がってから階段に上がります。

――　不思議な分節の仕方ですね。いわゆる箱階段とは違うけれど、完全に建築化されたものではなくて……。

島田　家具側に建築を寄せてきているんですけど、そうやって「置き家具化」すると、たくさんのものがあふれかえっても、　体のものとして室内風景をつくれるのではないかと思っています。同時に、それだけでは雑然とした風景になるので、「比叡平」でもそうですが、高い天井面があって、大きな余白があるというのが大事なのではないかと。

――　この「比叡平」では竣工後に家具が加わっても、オブジェみたいに見えないし、引っ込んでしまうわけでもない。

島田　ええ、それがじゃまみたいに見えたくないんです。「それがないほうがいいのにな」という場所ってありますけれど、あれ、非常にいやなんですよね。何かこう、その家具が居心地悪そうにしている。あるいは、建築家のあるスタイルや美意識がみなぎっていて、なんか建て主がマンガを冊持ち込むともう台なしになるような場所というのは、住宅の空間としてあまりいいとは思わない。そういうものが入ってきやすい、入ってきてもひとつの室内風景として成立するようにつくりたいというのは、日々の問題意識としてありますね。

この「比叡平」では、慣習的なドアというか、框のまわったちょっと伝統的なデザインの木の扉を入れたりしています。装飾的な意味もありますが、天井の高い空間をつくった場合に、空間の重心が上にいきすぎて井戸の底にいるようになってしまうのを避けているんです。目を引くディテールで、人の目線を下げさせる。ここではさらに階段とストーブを置くことが決まって、ようやく目線が落ち着いたという感じです。

――　この頃、若い建築家で、布を壁代わりに使う人がいますよね。ここのシャワーカーテンもチャーミングですが、そういう意図はありますか。

島田　機能的には広々と使いたいけれど、脱衣のときは隠れたいし、あまり浴室をつくり込む予算もないから、シャワーカーテンで仕切ろうということでした。カラフルなものを使ったのは、建て主と僕の趣味みたいなところもあります。とてもよかったので、最近は毎回使っていますよ。これは中に入るとオレンジの光に包まれて、それ自体がひとつの体験みたいでなかなか楽しい。

精度をコントロールする

――　ところで、島田さんはどのようにして事務所をスタートさせたんでしょうか。

島田　じつは、僕は独立するつもりがないままに始めたんです。大学院修了とほぼ同時に、友だちのお母さんから住宅の設計を頼まれて、1軒建てた。それが終わったら働きにいこうと思っていたら、その住宅が雑誌の狭小住宅特集にのって、それを見た人から次の仕事がきました。これだけ終えたら、今度こそちゃんと勉強しにいくぞと思っていたら、その次の仕事が……、みたいなことで。3軒目くらいでようやく、ああ、これは独立しているっていうことなんだなと、あきらめたという感じです。

僕は卒業した学校も、環境デザイン科ではありますが、いわゆる正統な建築家教育は受けていない。誰かのアトリエにいったわけでもないので、最初は何が何やらという感じです。自分のつくりたいものがわかってきたように感じたのは、ずいぶん後ですね。他人のオープンハウスで図面を見て、ああ、図面の順番ってこうなのかと(笑)。とはいえ、同世代の人よりは、わりとカッチリ始めたという感じがします。確立された安全なディテールから始めて、だんだん、どうやったらどういう効果とリスクがあるかがわかってきた。そういうつくり方ですね。

――　最初は大工さんたちと、もめましたか。

島田　いや、逆ですね。一番最初の住宅の仕事では、工務店が決まっていたんですよ。だからとりあえず「右も左もわからない若者ですけれど」という感じで、その工務店のつくり方を知りたいから、無給で現場に行ってトンカンと胴縁を留めたりしていた。「大工オリエンテッド」というか、現場向きにつくっていたのが、だんだんと自由になってきました。セルフビルド系から始めた人はみんなそうですが、大工の苦労がよくわかるので、現場で鬼のような変更ができなかった時代もあります。もちろん建て主のお金をあずかって現場を仕切っているんだから、そこはやり直しを指示しなくてはいけないと思いつつ……。今はもう、大丈夫ですよ(笑)。

だから今でも、設計事務所としては特殊というか、施工図レベルのものは全部描いてしまう。それを現場の人と、「僕はこうやれば納まると思うけれど、違う方法があったら教えて」という感じでやっていますね。

――　家具をつくったりするのも同じような感覚なんですか。

島田　そうですね。建築家の藤原徹平さんが言われた「ハーフ・ファブリケーション」という考え方に近いと思います。工務店がある　定の範囲をやって、その後、僕らがアッセンブルする範囲というのはけっこう広い。問題のない構造体をつくっておき、そこに入ってくる設えの部分では、うちの事務所がつくったり家具屋さんがつくったりして、その質をつねに担保しています。

最近気にしているのは、精度のコントロールという問題ですね。たとえば壁にしても、この「比叡平」ではラワン合板を突付け張りして、それにVPを塗っただけですが、個人的にはそれが　番いいのではないかと。これをボードにパテ留めとかにすると、途端に要求レベルが上がってしまう。クラックひとつ入ると、この住宅は曲がっているとか、建て主が思いはじめるんです。ラワン合板突付けにVPなら、何か問題があっても、取って張ってまたペンキを塗ればいい。そんな大らかなディテールとカッチリしたディテールとのレイヤーがあるほうが、伸びやかな住宅ができるのではないかと僕は思っているんです。

↑ 浴室／サニタリー

⑲両親のスペースとつながる部分に水まわりがまとめられている。正面奥はダイニングとキッチン。浴室／サニタリーには緑とオレンジのシャワーカーテンが掛けられている。

外観全景

1階床レベルを地面から760㎜掘り下げ、基壇部の高さは1,800㎜。右手に外壁に同化した玄関扉。庭でもある屋上面に3種類の壁・屋根の家型がのる（写真／鈴木研一）。

↑

山崎町の住居

↓

1階から2階ライトルームを見上げる

おもな生活空間は1階で、2階の3つの家型は、ライトルーム、サニタリー、ゲストルーム。ライトルームは、採光以外に、冬期の集熱、夏期の排熱装置としても働く（写真／鈴木研一）。

↑

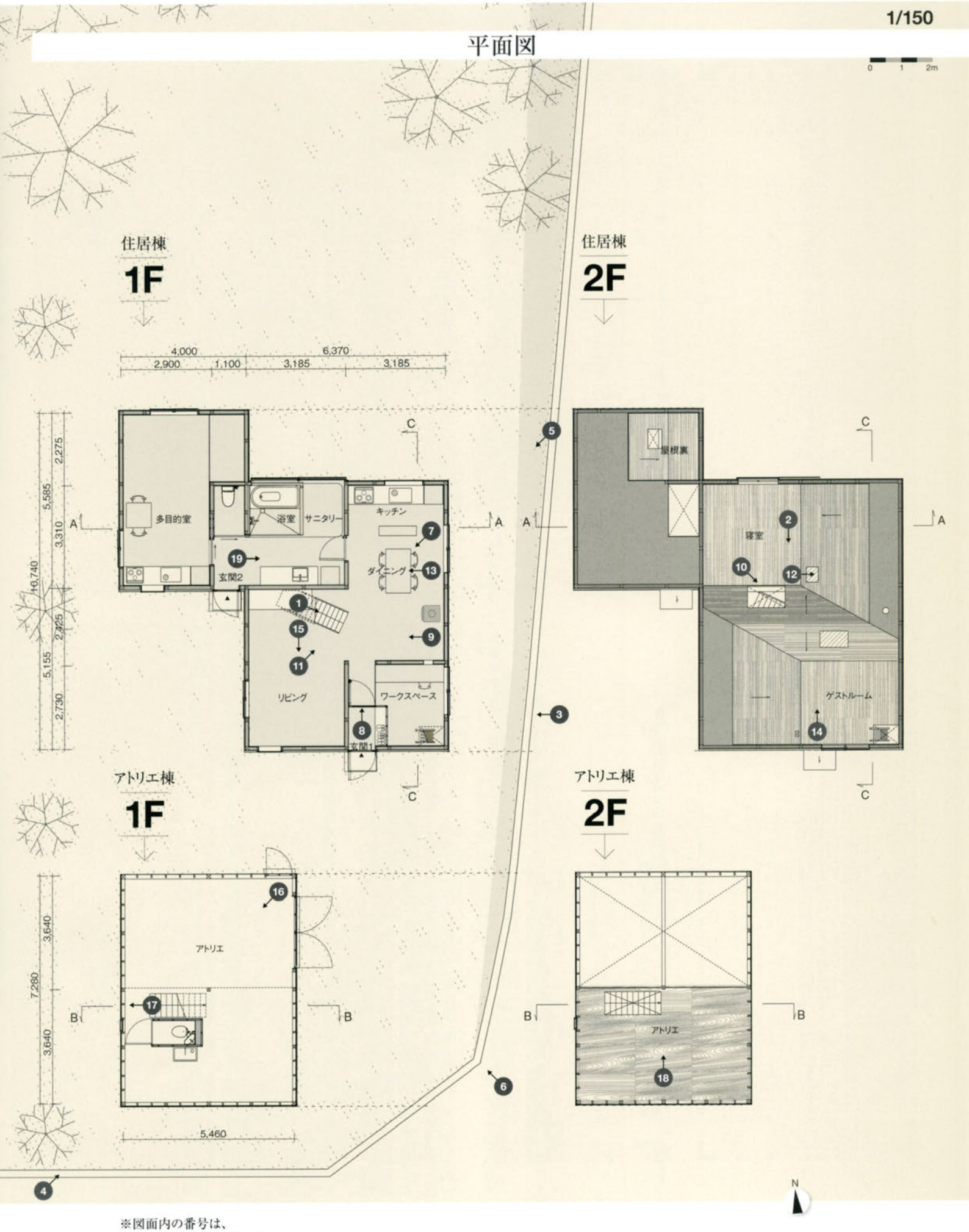
階段室全景

塩屋町の住居

築44年の木造家屋の改修。2.7m×2.7m×高さ5.4mの箱（階段室）を家の中心に挿入して構造的に補強し、内部を白く塗り込めた（写真／市川かおり）。

1/150

平面図



※図面内の番号は、
写真の番号と対応していて、
撮影位置と方向を示しています。

建築概要	
所在地	滋賀県大津市
主要用途	2世帯住宅+アトリエ
家族構成	夫婦+両親+猫2匹
設計	島田陽／タトアーキテクツ／島田陽建築設計事務所
構造設計	S³ Associates
構造	木造在来工法
施工	高橋工務店
階数	地上2階
敷地面積	490㎡
建築面積	116.01㎡
延床面積	186.14㎡
設計期間	2008年7月～2009年2月
工事期間	2009年11月～2010年3月
工事費	
建築	14,301,697円
電気	2,883,190円
空調	448,420円
衛生	1,203,985円
家具 什器	373,240円
その他	383,926円
総工費	19,594,458円
坪単価	342,453円

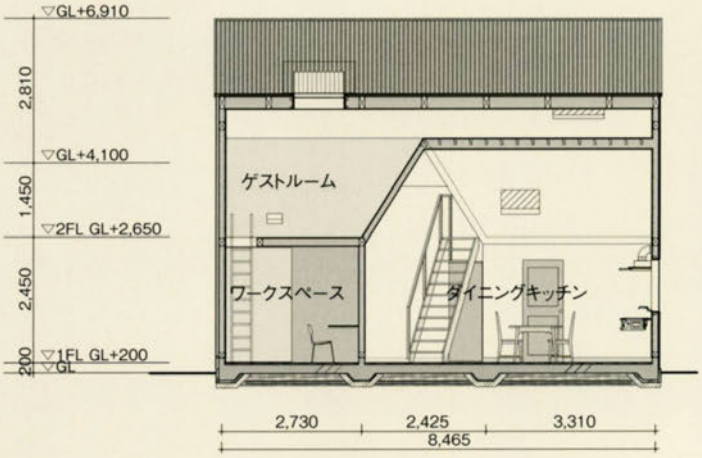
おもな外部仕上げ	
住居棟	
屋根 外壁	ガルバリウム鋼板波板t=0.4㎜
アトリエ棟	
屋根 外壁	高圧木毛セメント板t=30㎜下地 ポリカーボネイト透明波板
開口部	木製建具 アルミサッシ
おもな内部仕上げ	
キッチン ダイニング リビング	
床	モルタル金ゴテ仕上げt=30㎜ 防塵塗装 床暖房
壁 天井	ラワン合板t=6㎜+6㎜VP (塗装のみ施主施工)
サニタリー	
床	モルタル金ゴテ仕上げt=30㎜ 防塵塗装 床暖房
壁 天井	珪酸カルシウム板t=6㎜+6㎜VP
ワークスペース	
床	モルタル金ゴテ仕上げt=30㎜ 防塵塗装 床暖房
壁 天井	ラワン合板t=6㎜+6㎜ウッドワックス
寝室	
床	構造用合板t=12㎜下地 ラワン合板t=6㎜ウッドワックス
壁 天井	ラワン合板t=6㎜+6㎜ウッドワックス
アトリエ1階	
床	モルタル金ゴテ仕上げt=30㎜ 防塵塗装 床暖房
壁 天井	木毛セメント板t=30㎜(下地現し)

島田 陽
Shimada Yo

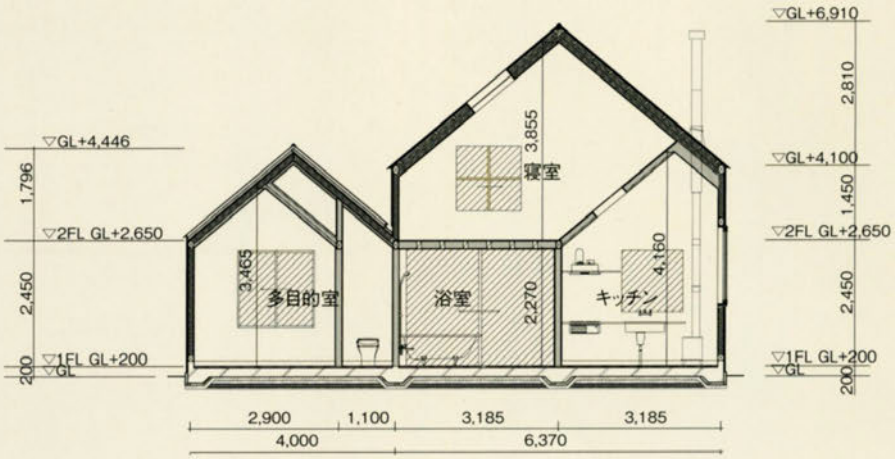
しまだ よう／1972年兵庫県生まれ。95年京都市立芸術大学美術学部環境デザイン科卒業。97年同大学大学院修士課程修了。97年タトアーキテクツ／島田陽建築設計事務所設立。おもな作品＝「タトハウス 北野町の住居2」(2008)、「二子新地の住居」(10)、「六甲の住居」(11)。

1/150

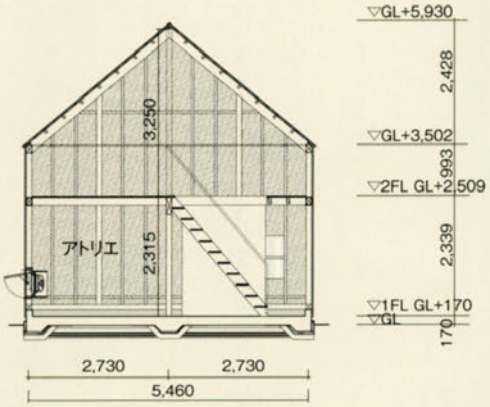
住居棟／C−C断面図



住居棟／A−A断面図



アトリエ棟／B−B断面図



見立てて

設計　藤田雄介

建物名　「翠ケ丘の住宅」

建築家・藤田雄介さんの思考のなかでは、壁とガラス戸は限りなく似ているようだ。ガラスを壁に見立てることで、マンションの室内に外部をつくるというリノベーション。その発想をスタディする。

取材・文／加藤 純　写真／川辺明伸

1 ①マンションの一住戸のリノベーション。玄関を入ったところにつくられた「ルームテラス」という名の屋外的スペース。この"室内の外部化"は、木製ガラス引き戸というありふれた建具の意味をとらえ直し、壁に見立てることで生まれた。

ガラスを

ケーススタディ

↑ ガラス引き戸開放

③庭の樹木越しに見た室内のような感覚。アールを付けた壁面の内部は収納。

②玄関扉側から見た、木製ガラス引き戸を開放した状態。引き戸の高さは1,850㎜。

↓ ガラス引き戸を正面から見る

距離感をつくり出す素材としてのガラス

4

↑ 寝室側から見る

⑤床材は、右手ウリン無垢、左手ナラ無垢。⑥框はスプルース。ガラスは5㎜厚。

④右手浴室の窓は、キッチンを抜けて、南側テラスまで視線が通る。

↓ 引き戸上部

6

↓ 床材とレール

5

ゆとりのある共用の中庭と廊下を通ってアプローチする、マンションの　住戸。玄関扉を開けて入ると、再び外がある。正確には、室内ではあるけれど、確かに外と感じられるスペースがある。

この不思議な経験をする大きな要因は、入って正面に設えられたガラス戸という「壁」にある。この面によって、向こうの部屋に対して、手前の右手に広がるスペースが外のように感じられるのである。玄関を入って右手は土間ともサンルームともいえない空間で、植物が置かれている。木製のガラス引き戸をあえて壁と呼んだのは、設計をした藤田雄介さんの思考のなかでは、壁とガラス戸は限りなく似ているため。そして実際に、この部屋で果たしているガラス戸の役割は壁と類似している。

外を室内に呼び込むリノベーション

築25年であった約80㎡、子持ち世帯向けの住戸を親世帯の夫婦だけで使うことになり、部屋数や面積にゆとりが生じる。コンクリートの軀体自体を新築における敷地のようにとらえたうえで、どのような環境をつくるかと藤田さんは検討した。

既存の軀体とのあいだに「隙間」ができるように新たに壁をまわし、ワンルームの居室をつくった。必要とされる収納は「隙間」の中に納めている。冒頭に述べた玄関脇のスペースも、この隙間の　部として位置付けられる。藤田さんが「ルームテラス」と呼ぶスペースだが、そのルームテラスはもうひとつ、外部テラスから連続するダイニングキッチンにもある。どちらの床にも外部テラスの床材に使ったウリン材を用いることで、ナラ材を張った居室とのコントラストを出し、外が室内に入り込んでくるようなつながりをもたせている。

藤田さんはもとの間取り、柱梁の構造や開口部の位置、眺望などの条件も細かく読み取っている。部屋の構成自体はあまり変えていない。ただし、体験としては従前とはまったく違うことがうかがい知れる。壁の主要なコーナーにはアールをつけることで、部屋と廊下という区切りを感じることなく一体感が生み出された。神戸の斜面地には「六甲おろし」と呼ばれる、北の六甲山脈側から南の海に吹き抜ける風がある。コーナーにアールをつけることで、南北の風や光の流れを遮ることがないという。水まわりも、位置は当初のままで浴室を拡大し、小屋のように浴室と洗面所を　体化。外――ルームテラス――室内という構成のさらに内側の存在として関係をつくっている。浴室と寝室のあいだ、洗面所とキッチンのあいだには引き戸をもつ開口部を設置して、風や視線が抜けていくようにされている。

↑ リビングからダイニングキッチンを見る

既存の軀体とのあいだに
「隙間」ができるように
壁をまわす

距離感をつくる素材

さて、玄関脇のルームテラスと寝室のあいだにあるのが、例の壁のようなガラス戸である。もとはふたつの個室に分ける間仕切り壁だったところを、垂れ壁と建具枠、床のV字レールを設けて、木製枠のガラスの引き戸で置き換えた格好になる。ガラス戸は5枚で、引き寄せることができる。5枚に割った理由は、常時は閉めた状態を想定しながらも、ときどき全開するときの開放感をより高めるため、また1枚の建具のプロポーションがきれいに見えるところ（1000㎜×1850㎜）で決定したためだという。框の材質はスプルースで、ガラスの厚みは5㎜。ガラスをもっと薄く、木枠の見付けをより細くもできたが、使用上無理のないところで製作した。「はじめから木製ガラス引き戸を入れようと思った」という藤田さん。寝室とルームテラスを内と

外に見立てるなかで、ガラス戸は仕切る機能だけではないものとして選択された。藤田さんは「ガラスは透明といっても本当に透明ではありませんし、ちょっとした距離感をつくり出す素材としてとらえています」。

ガラスはあるものかないものか

建築に使われるガラスの面について、興味深い話がある。1960年の世界デザイン会議でポール・ルドルフ（Paul Rudolph）氏が来日し、篠原　男氏と対談した際、「ガラスはあるものか、ないものか」という議論がされたという。篠原氏はガラスを「あるもの」、ルドルフ氏はガラスを「ないもの」としてとらえていた。両者の感覚は、設計した空間にまちがいなく違いとして表れているであろう。

この話題に触れると藤田さんは、妹島和世氏がガラスを「反射するもの」としてとらえていることを連想した。彼女は、ガラスを見ている人の像や周囲の風景がガラス自体に映り込む特徴を強く意識して設計している、ということである。

藤田さんは、前に挙げた日本人建築家のふたりの感覚を併せ持っているようだ。透明さを生かしてワンルーム空間に視覚的な広がりを与えつつ、ガラスを「あるもの」とみて、反射しながら仕切られる境界に、新たな関係性や心理的な距離感が生まれることを期待している。そして、ガラスをやわらかな表情の素材のひとつとして、壁のシナ合板などと同列に扱う。ガラス框のスプルース材にはクリア塗装、シナ合板には濡れ色で色が沈むことを避けるためにクリアにバーチ色を混ぜて、ガラス引き戸と壁面が同じトーンで調和するように細心の注意が払われている。

↑ 北から南の見通し

⑦奥のダイニングキッチンは、左手テラスと一体となった、もうひとつのルームテラス。⑧北側寝室から南側を見通す。

使い込まれた要素をとらえ直す

ひとつの住戸のコンテクストで生まれた木製枠のガラス引き戸に藤田さんは可能性を見出し、続く案件でもガラス戸を展開。ほかのマンション住戸のリノベーションでは、細長いプランの真ん中に9枚の引き戸を並べた。中桟を設けて、透明ガラスのほかにも型板ガラスや合板を適宜はめることで、数枚は目隠しとしての機能ももたせている。

UR（都市再生機構）の団地再生コンペを勝ちとった計画（2013年完成予定）では、各住戸の　部屋を半屋外テラスとして開放し、そこに面する建具をはじめ、既存の窓面にも木製ガラス引き戸を採用。やはり中桟を付け、用途に応じてあいだにはめられる材料は変えられるようにしている。

「この『翠ケ丘の住宅』などでの試みを発展させて、木製ガラス引き戸がより多様な関係性を生み、団地風景全体に豊かな表情をもたらす存在になるはず」と藤田さんは言う。

木製ガラス引き戸という使い込まれた建築の構成要素を、1軒のリノベーションを通して繊細にとらえ直した藤田さん。新たな意味をもたせることで壁と建具の差異は揺らぎ、両者の可能性はさらに広がろうとしている。

↓ キッチンカウンター

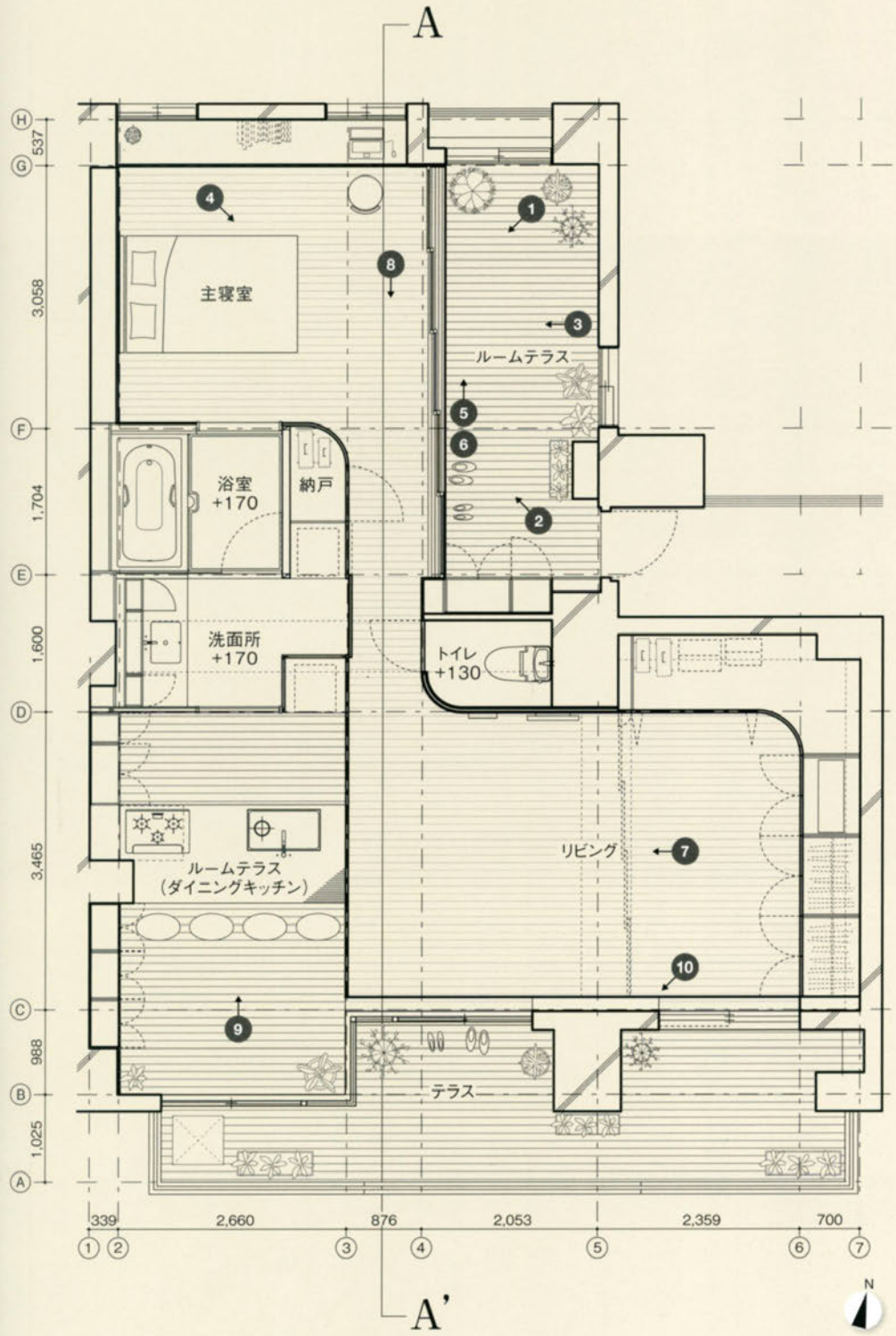
⑨正面に洗面所・浴室（開口部は目隠しの引き戸あり）。右手アールの壁面の内側にトイレがある。

翠ケ丘の住宅

1/80

改修後平面図

0 0.5 1m



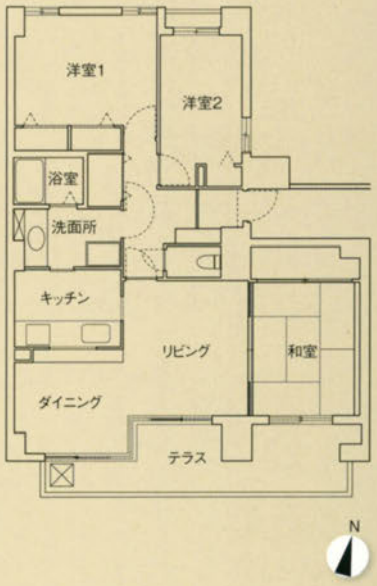
Before

After

1/200

改修前平面図

0 1 2m



*図面内の番号は、
写真の番号と対応していて、
撮影位置と方向を示しています。

建築概要	
所在地	兵庫県芦屋市
主要用途	専用住宅(集合住宅の1住戸)
家族構成	夫婦
設計(改修)	藤田雄介／Camp Design inc.
施工	キョーワテクノ
構造	鉄筋コンクリート造
階数	6階建ての2階部分
延床面積	81.46㎡
設計期間	2009年10月～12月
施工期間	2010年1月～3月
総工費	約700万円

おもな内部仕上げ	
ルームテラス(玄関、ダイニングキッチン)	
床	L-45遮音合板のうえ
	ウリン無垢フローリング
	オスモ塗装仕上げ
壁	PB寒冷紗パテしごきのうえ
	EP塗装
天井	PBクロス張り
リビング　主寝室	
床	L-45遮音合板のうえ
	ナラ無垢フローリング
	オスモ塗装仕上げ
壁	シナ合板　オスモ塗装仕上げ
天井	PBクロス張り
洗面所	
床	耐水合板VP塗装
壁	PB寒冷紗パテしごきのうえ
	EP塗装
天井	PBクロス張り

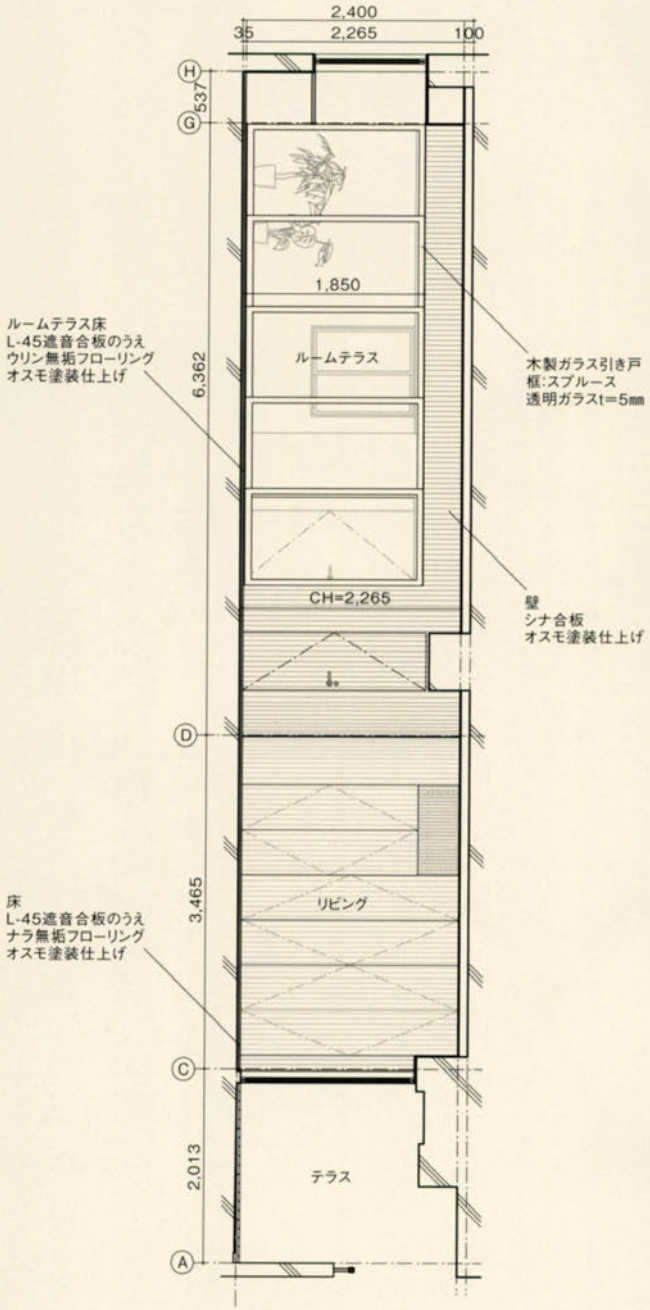
藤田雄介
Fujita Yusuke

ふじた　ゆうすけ／1981年兵庫県生まれ。2005年日本大学生産工学部建築工学科卒業。07年武蔵工業大学（現：東京都市大学）大学院工学研究科修士課程修了。08～09年手塚貴晴＋手塚由比／手塚建築研究所。10年Camp Design inc.主宰。おもな作品＝「上町の住宅」(10)、「日吉の住宅」(11)。おもな受賞＝12年UR団地再生デザインコンペ最優秀賞。

1/80

A－A’断面図

0　0.5　1m



⑩リビングの開口部。面を塗り分けることで、シナ合板の壁面を薄い皮のように見せ、やわらかい表情をもたせている。

家具化した壁

設計　鈴野浩一 + 禿 真哉

建物名　「目黒本町の住宅」

隔てることだけが役割の壁はもはや珍しいのかもしれない。壁が意図をもって立ち上がるとき、そこにどのような場所が生まれるのか。トラフ建築設計事務所・鈴野浩一さんと禿真哉さんの提案を読む。

取材・文／伏見 唯　写真／傍島利浩

①築約40年のRC造のビル。その2、3階が住居にリノベーションされた。内部動線を設けるために3階中央に穴をあけ、その真下に、階段を組み込んだ約2.4m×2.3m×高さ1.7mの箱が置かれている。写真は2階、その箱の4面の壁のうち、客間の壁を正面から見たところ。「中央に家具のような箱を置くだけ」で解決されたといってもいい空間は、壁の役割を再考する手がかりになっている。

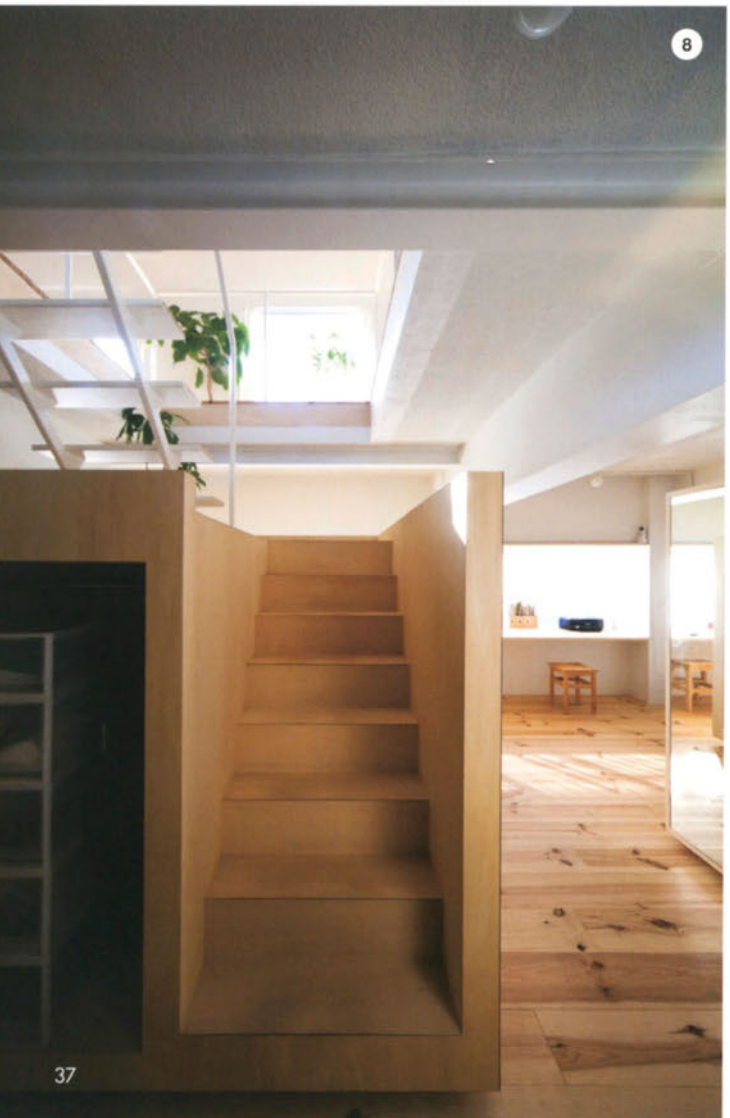
1

②階段を組み込んだ箱の上面は、上下階をつなぐ半階の床面となっていて、平面的にも断面的にも空間全体をゆるやかに仕切り、つなぐ。箱の仕上げはシナ合板。3階スラブの穴をあけた部分は、H鋼の梁で補強している。

⑤既存の出窓を利用した大きな机を設け、箱の壁面を本棚にすることで、書斎スペースをつくっている。⑥3階。リビングから主玄関（左手奥）、キッチン側を見る。

壁がもつ
場所を規定する力を
効果的に用いている

③寝室に面した壁は、壁掛けテレビや収納が設けられている。右奥は勝手口。④箱の上面から3階ダイニングを見る。天井との隙間が多様な視線の抜けをつくる。



⑦3階天井は小梁のような照明が梁と交差。階段下部正面は浴室。⑧箱の足元は4面とも50㎜浮かせて、間仕切り壁でありながら家具のような軽さも併せ持つ。

東京都目黒区の東側に位置し、品川区と隣接している月光原住区。古くから住みつづけている人が多く、下町の雰囲気や人情が残る街として知られている。「目黒本町の住宅」は、そんな住宅街の　画に立つ築40年ほどたったビルをリノベーションしてつくられた住宅である。

既存の建築物は地下1階、地上3階の鉄筋コンクリート造で、もともとは地下1階から2階までが倉庫と事務所、3階が住居として使用されていた。今回の工事では2階も住居として拡張し、2階と3階の住居部分がリノベーションされている。地下1階と1階は店舗として活用するため、2期工事を予定しているという。近所の親しい住民とふれあえる、この街らしいあたたかい店舗になりそうだ。

縦と横のつながりを再調整する

改修前後を見比べると、もともとは事務所と住居という独立した用途だった2階と3階を　体の住居としてリノベーションするにあたり、縦と横のつながりをそれぞれ再編集することが改修の要点だったようだ。まず、このビルでは、各階の行き来は外部階段でしかできないつくりだったため、縦のつながりを内部でつくる必要があった。浴室から居間に移動するのに　度外に出なければいけないのは酷である。そのため、3階中央のスラブに大穴をあけ、その真下に階段を設え、内部に動線がつくられた。いわば一戸　化の手法である。また、この内部階段の踊り場は広くつくられ、2階と3階のあいだに中2階ともいえるレベルがある。3階レベルから1150㎜低い位置にある中2階は、2階からも3階からも近からず遠からず。2階と3階の一体化に効果を発揮しているように感じられた。

次に、3階だけだった住居スペースが拡張されるため、2階と3階の間取り、いわば横のつながりが再調整された。この地域は住宅街のため、3階建てのビルは、周囲より頭ひとつ飛び出ている。そのため、3階部分の間仕切りを取り払ってしまえば、4面から採光や通風が得られ、明るく開放的な空間になる。この明るい3階が、間仕切りのない大きなLDKのスペースになった。　方で、隣家に開口部を遮られてしまう2階に、閉鎖性の高いプライベートなスペースが配されている。その際、寝室や書斎などを、隔てなく　緒に配置するのはさすがに難しく、もともとはがらんどうに近かった2階のスペースがいくつかに仕切られることになった。この2階の分節のためにつくられたのが、この住居の中央にある「箱」だった。

箱による空間の分節

この住居の2階には、2360㎜×2260㎜×高さ1700㎜のシナ合板仕上げの家具のような「箱」が置かれている。この箱は、2階と3階をつなぐ中央の内部階段を仕込み、さらに2階のプライベートなスペースを確保するためのゆるやかな仕切りにもなっている。寝室などの用途上、閉鎖性は求められたが、西側の出窓からの光を全面に取り入れたり、間取りの回遊性を重視したため、完全に部屋として隔てることも難しかったという。そのため、中央に大きな箱を置くだけ、という大胆な方法による分節が試みられたのだ。そして、それぞれのスペースは、部屋として壁で囲われるわけではなく、箱の周囲になんとなく確保されている。北側に客間、南側に寝室、東側に廊下、西側に書斎である。既存躯体や住まい手の目線、各スペースの機能などから検討されたという配置とスケールのこの箱は、フロア全体を明るく、そしてゆるやかにつなげながらも、それぞれの場所を生かした適度な距離感を生み出していると感じられた。

家具のような箱を置くだけで各スペースがしっかりと性格付けられているのは、なぜか。それは、場所の性格に対する壁の強い規定力によるものだと思う。この場合、箱の壁である。周囲の機能に合わせて、箱の壁は各面で異なっている。出窓側の面には本棚が造り付けられ、箱と出窓のあいだを書斎として使えるようにしている。また、南側の面には壁掛けテレビが取り付けられ、広い収納もあり、寝室らしい設えがなされている。部屋として囲われていなくとも、こうした壁の設えが、その周囲の場所の性格を決めているのだろう。

2階の間取り、つまり横のつながりは、このように箱によって再調整された。また、この箱の上面が中2階の踊り場であるため、じつは縦のつながりもこの箱が担っている。

1700㎜の高さの箱と3階スラブのあいだには730㎜、梁とのあいだには230㎜の隙間があり、人が移動することで視線が抜けたり遮断されたりしながら、2階、中2階、3階の縦方向をゆるやかにつないでいるのだ。既存建築物をリノベーションするにあたり検討する必要があった縦と横のつながりの再調整は、いずれもこの家具のような箱を設置する　手によって果たされたのである。

壁を家具化する効果

本来、壁は無垢な隔てである。風雨から室

内を守ったり、隣室から見られないように視線を遮断するなどの、「隔て」としての役割が、壁の本務だろう。「かべ」という和語は、「垣隔てる」が由来であるともいわれている。しかし、壁には兼務もある。たとえば、書院造において、床や違棚などの座敷飾りを配した壁は、部屋の格を表す象徴として、重要な役割を担っている。また、棚が取り付けられれば壁は収納力をもち、絵画が掛けられたら壁はその部屋の顔にもなるだろう。装飾や機能が取り付けられることによって、壁という面には、さまざまな意味が付加されて、壁は兼務を担うことになるのだと思う。書院造のように、時には壁によって、その場所の性格が強く決められることもある。

目黒本町の住宅は、こうした壁の兼務である、周囲の場所の性格を規定する力を効果的に用いていると思う。箱の壁はその周囲の用途を大きく補佐し、場所の性格付けを行っている。そしてその効果は、箱あるいは壁の家具化によって、よりいっそう強調されているのではないか。この箱を建築物の一部というよりも家具のように見せることによって、壁の隔ての印象が薄まり、むしろ本棚や収納が本務である家具に近い存在としてこの箱は際立っている。キッチンカウンターのような50㎜の浮きやシナ合板の仕上げも、家具化のための仕様である。壁の機能性が際立てば、自然とその場所の用途の性格も強まるだろう。

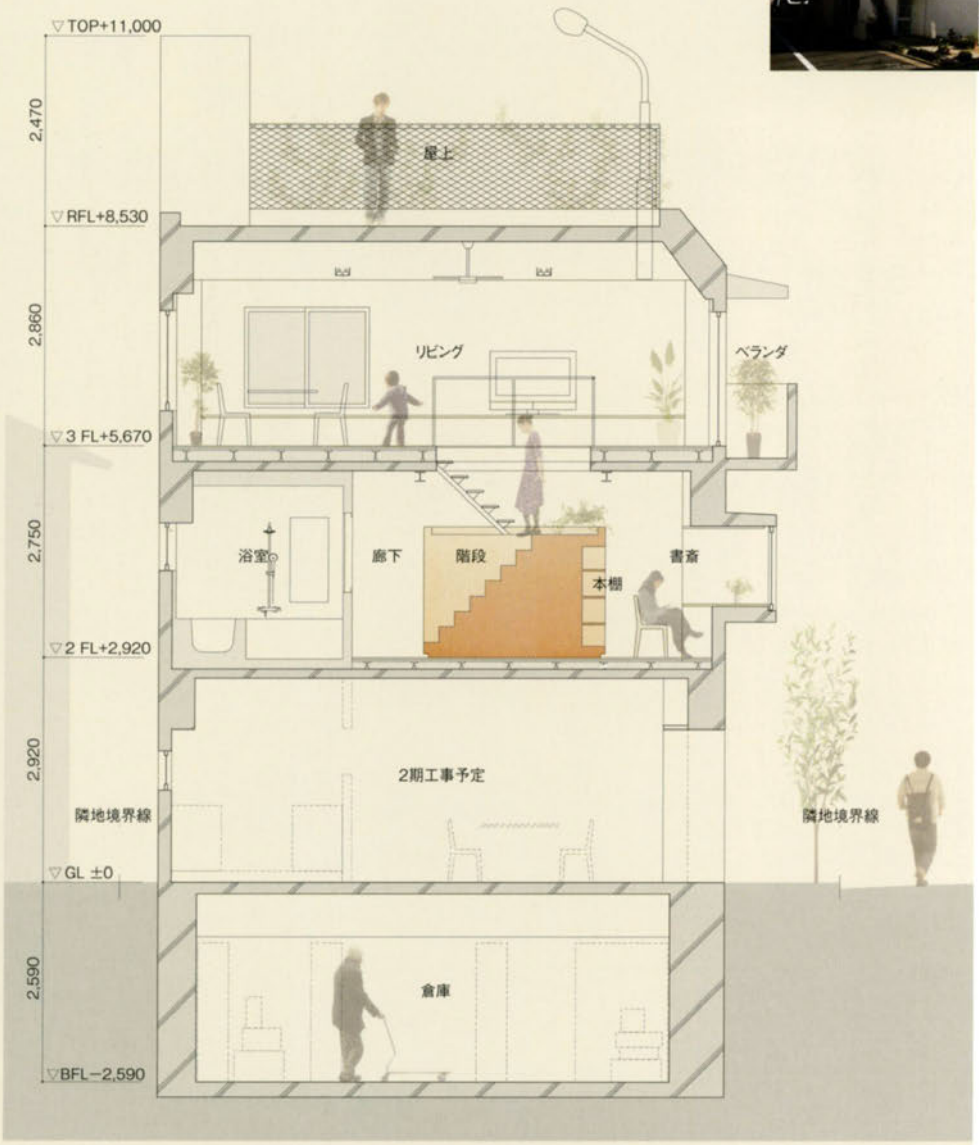
隔てることだけが役割の壁はもはや珍しい。壁に機能や装飾などが付加されたとき、その周囲にどのような場所がつくられるのか、あらためて考えてみるべきなのかもしれない。

断面図

1/100

0 1 2m

⑨北西側全景。RC造地下1階、地上3階建てのビル。外観の変更は既存テント庇撤去など、整理し、全体を白く塗る程度に留めている。



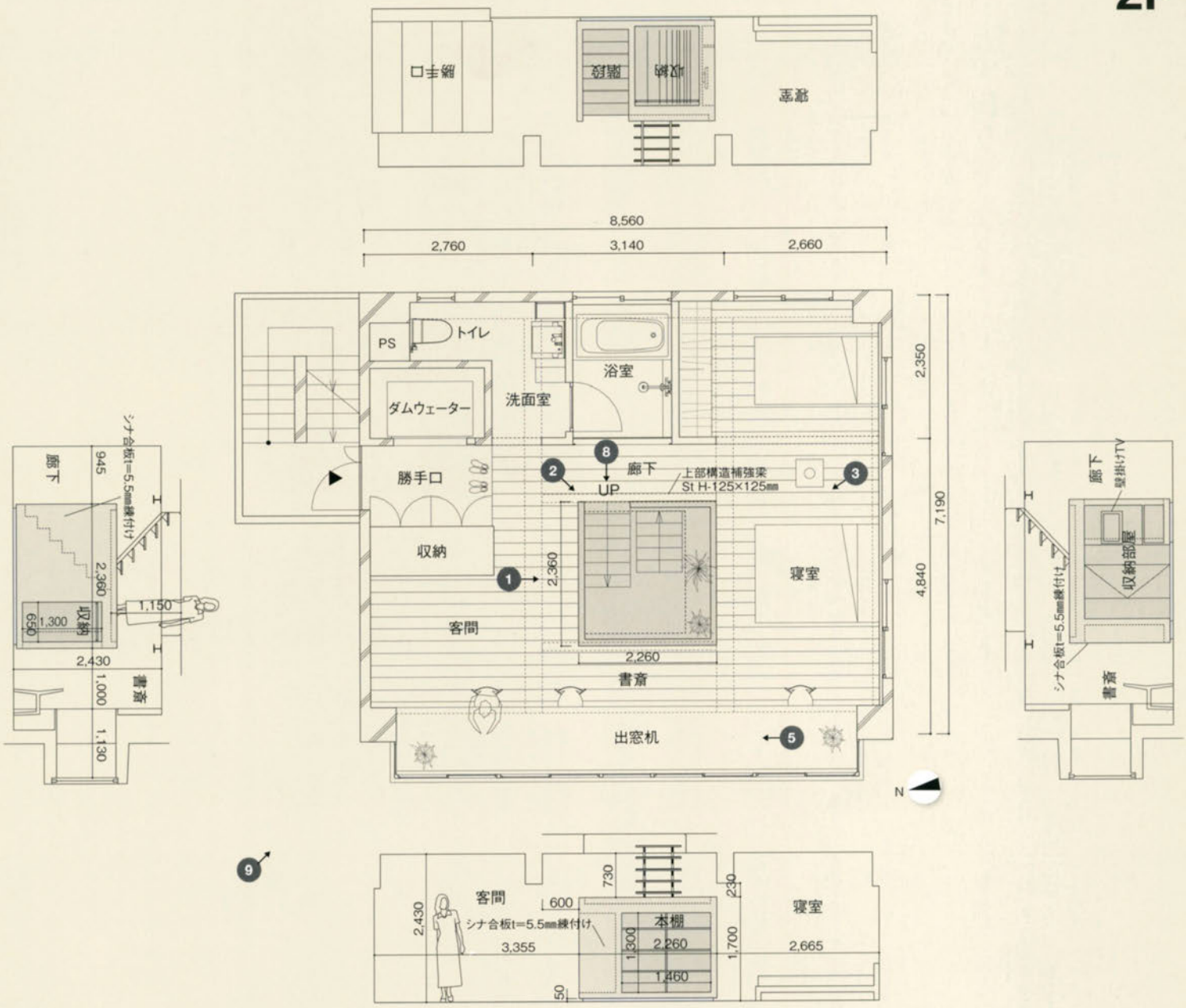
既存は3階が住居で、2階以下は事務所倉庫だった。将来は1階と地下も改修し、店舗などにする予定があるという。

1/100

2階平面図／展開図

0 1 2m

2F

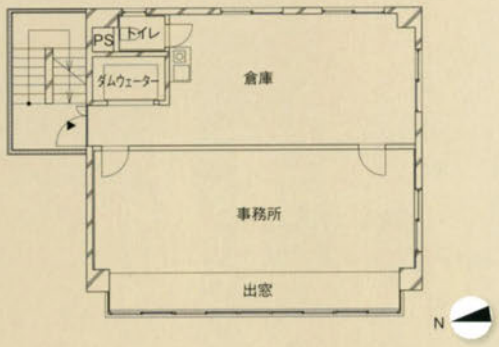


1/200

改修前2階平面図

0 1 2m

2F



※図面内の番号は、
写真の番号と対応していて、
撮影位置と方向を示しています。

建築概要	
所在地	東京都目黒区
主要用途	専用住宅
家族構成	夫婦+子ども1人
設計(改修)	鈴野浩一 + 禿真哉／トラフ建築設計事務所
構造アドバイス	オーノJAPAN
施工	月造
構造	鉄筋コンクリート造
階数	地下1階、地上3階
延床面積	119.80㎡(2、3階部分)
設計期間	2011年3月～2011年7月
工事期間	2011年8月～2011年12月

おもな外部仕上げ	
外壁	既存躯体のうえ 水性セラミックシリコン樹脂塗装
開口部	アルミサッシ

おもな内部仕上げ	
キッチン	
床	磁器質タイルt=9㎜
壁	PBt=12.5㎜EP　キッチンパネル
天井	既存躯体モルタル補修EP
リビング	
床	ボルドーパイン無垢フローリング
壁	PBt=12.5㎜EP
天井	既存躯体モルタル補修EP
照明	上部間接照明BOX(金物工事製作)
寝室	
床	ボルドーパイン無垢フローリング
壁	PBt=12.5㎜EP
天井	既存躯体EP

鈴野浩一
Suzuno Koichi

すずの　こういち（写真左）／1973年神奈川県生まれ。96年東京理科大学工学部建築学科卒業。98年横浜国立大学大学院工学部建築学専攻修士課程修了。98～2001年シーラカンスK&H。01～02年NMBW Architecture Studio（メルボルン）協働。02～03年Kerstin Thompson Architects（メルボルン）。04年より禿真哉とトラフ建築設計事務所共同主宰。現在、昭和女子大学、武蔵野美術大学、多摩美術大学非常勤講師。

禿 真哉
Kamuro Shinya

かむろ　しんや（写真右）／1974年島根県生まれ。97年明治大学理工学部建築学科卒業。99年同大学大学院修士課程修了。2000～03年青木淳建築計画事務所。04年より鈴野浩一とトラフ建築設計事務所共同主宰。現在、昭和女子大学非常勤講師。

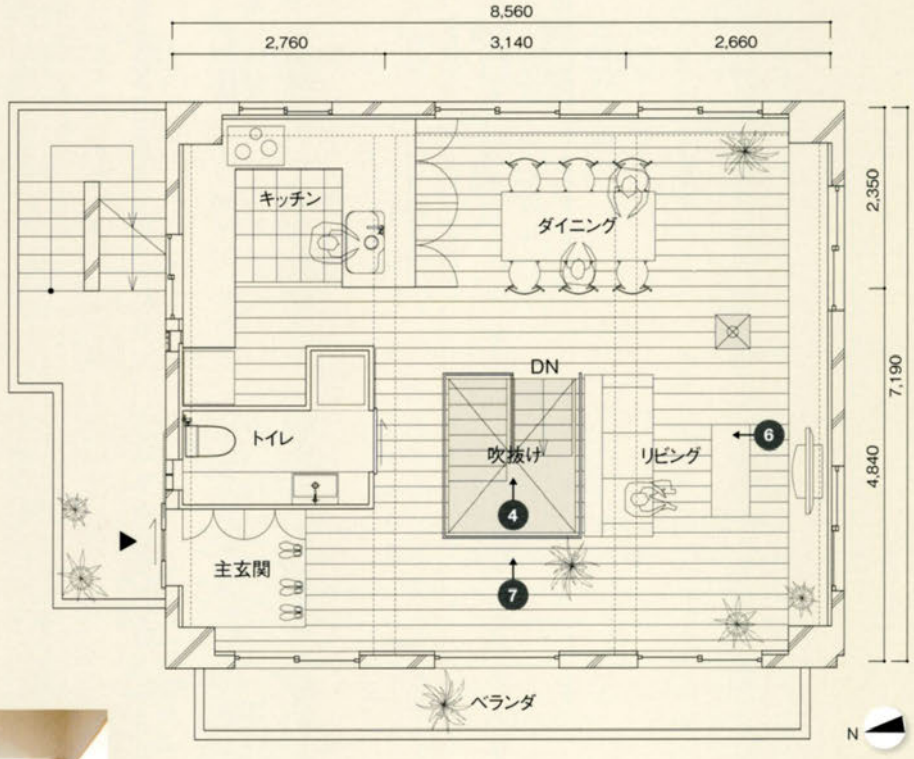
おもな作品＝「テンプレート イン クラスカ」(04)、「ブーリアン 東大医学部教育研究棟 鉄門カフェ」(07)、「港北の住宅」(08)、「NIKE JMC」(09)、「Y150 NISSAN パビリオン」(09)、「大岡山の住宅」(10)、「光の織機（Canon Milano Salone 2011）」(11)。おもな受賞＝05年アジアデザインアワード アジアデザイン大賞。08年商空間アワード2007グランプリ。11年ELITA DESIGN AWARDS 2011最優秀賞。

1/100

3階平面図

0　1　2m

3F



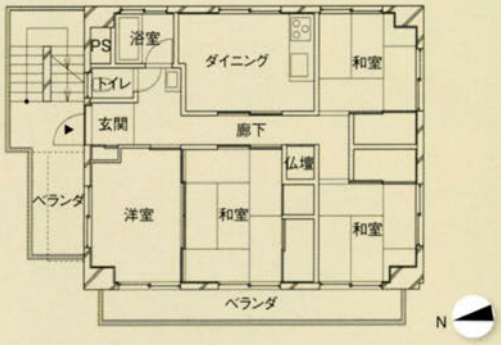
Before　After

1/200

改修前 3階平面図

0　1　2m

3F



うら かずや／建築家 インテリアデザイナー。1947年北海道生まれ。70年東京芸術大学美術学部工芸科卒業。72年同大学大学院修士課程修了。同年日建設計入社。99～2012年日建スペースデザイン代表取締役。現在、浦一也デザイン研究室主宰。北海道日建設計デザインアドバイザー。著書に『旅はゲストルーム』（東京書籍 光文社）、『測って描く旅』（彰国社）がある。

ブータン王国に17年ぶりで行ってきた。九州ほどの広さだが、インドと中国に接し、ヒマラヤに抱かれて北側は標高が高い。若き国王夫妻が来日してちょっとしたブームになり、「国民総幸福量（GNH）」という考えに共感した人々も少なくないはず。

しかし、行ってみるとずいぶん変わっていて驚いた。保存と開発のバランスに悩んでいることがよくわかる。大都市近郊の住宅開発、ダムの建設、自動車の増加に追いつかない道路建設と修復、道端の直営売店の増加、携帯電話の爆発的普及、民族衣装姿の減少など……。「ブータン、おまえもか！」と叫びたくなるほど、われわれがかつて、あるいは今、通っているつらい道を歩みはじめているのがわかってしまって、なんとも痛々しい。

でも山河の大自然は、すばらしい。「耕して天に至る」というような棚田が巨大な谷や山を覆いつくしていて美しい。ここにいると、人間が自然の一部であることや、便利が必ずしも快適ではないことがよくわかる。

ヒューマンスケールの世界と、そうはいかない世界との調和を模索しているわれわれにとって、この国の行く末にはたいへん興味がある。応援したくなるのだ。

牛や犬がのんびり道路に寝ているのを避けながら走行する旅が続いた。

＊ゾン ブータン各地にある大建築。城塞 僧院 庁舎。基本構造は民家と変わらず版築。

パロ谷の朝

がありがたい。

朝、バルコニーからパロ谷を眼下に望む。じつに幻想的。谷を巡り、山を登って雲が激しく流れていく。まるでこの国の象徴の雷龍（ドラゴン）が走りまわっているかのようだ。いにしえの人々が大自然に畏怖を感じたことがよくわかる。

さて、今日も悪路と闘うか。

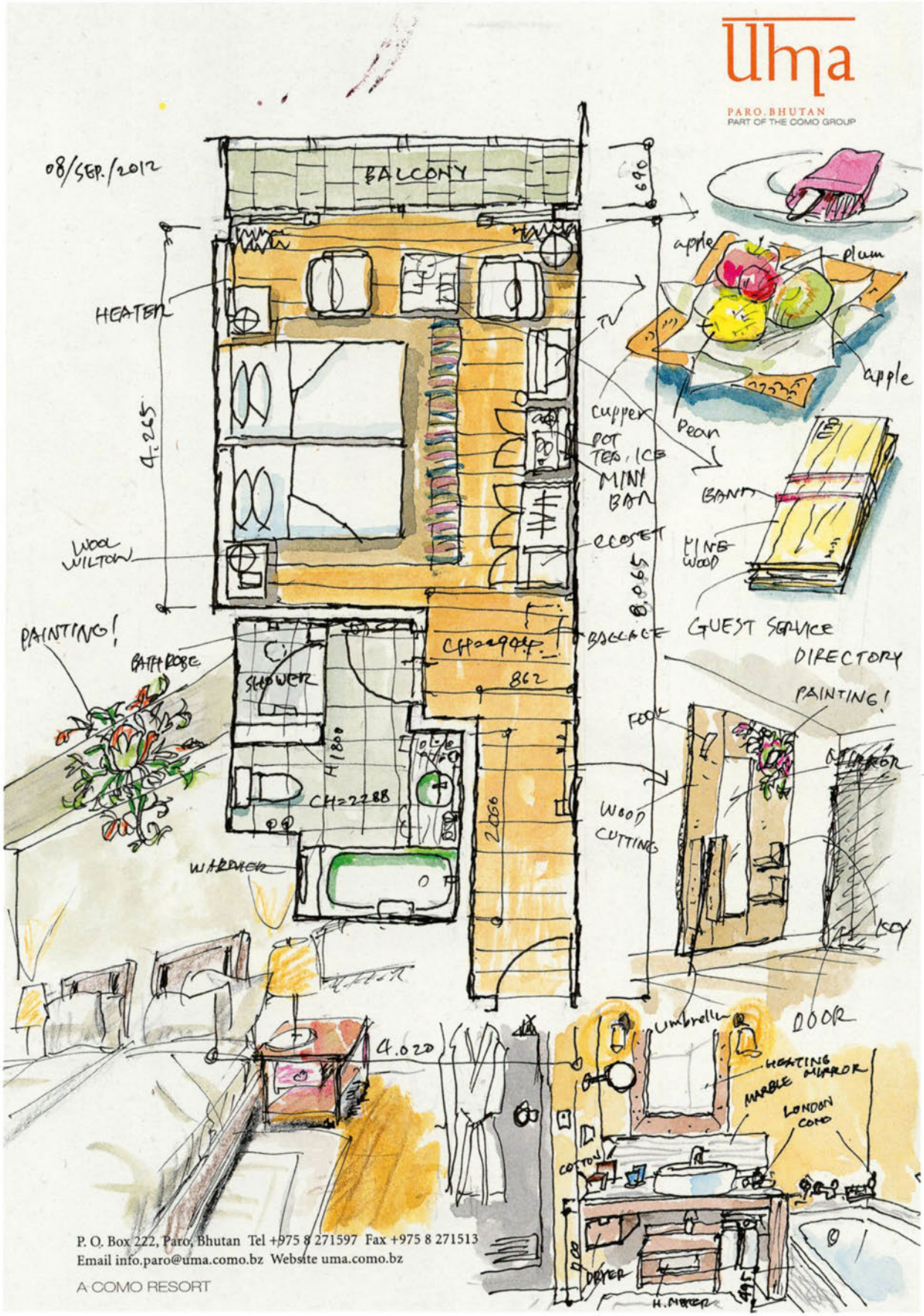
旅の終わり頃、国際空港のあるパロのホテル、ウマ・パロに投宿。伝統的なゾン（＊）をモチーフにした建物デザイン。2004年にリニューアルされたときに変更されたのだと思われるが、ロビー各所には民家などで使われた厚い床材がふんだんに使われている。スパやジムも充実していて、別棟のホットストーン・バスハウスには石を焼き、水に入れて湯を沸かす形式の浴槽「ドツォ」もある。ダイニングルームの料理もなかなかだ。9棟あるコテージ風のヴィラにゆっくりと泊まってこれらを満喫したいもの。

ゲストルームの意匠は先端的ではないが、大人のデザイン。気にさわるようなものが何もないことで、大きな安心感につながる。苦しい電力事情や給水事情もクリアして、それまでのストレスを忘れさせてくれた。国内で1、2を争うといわれる充実した設備はまったく遜色なく、バスルームはシャワールームがある4イン1。タオルウォーマーやミラーの曇り防止

ホットストーン バス

ブータンのぜいたく

Text & Sketch by Ura Kazuya



オーセンティックなバスルーム。

Uma Paro Bhutan

Add／P.O.Box 222, Paro, Bhutan
Tel／+975 8 271597
Fax／+975 8 271513
Email／uma.paro@comohotels.com
URL／www.comohotels.com/umaparo
Room Charges／Forest View Room (Superior Room) 300US$, Valley View Room (Deluxe Room) 400US$, COMO Suite 600US$, 1 Bedroom Villa 700US$, COMO Villa 1,100US$(4名)
1 US$=83.91円(2012年12月21日現在)

モダン日本のニズムを

1

自邸　設計／山口文象

Yamaguchi Bunzo × Fujimori Terunobu

1／現在の道路側全景。これだけ見ると現代建築のようだが、流れ下る瓦屋根を除くと、その後の増築になる。

たどるとき

連載 現代住宅併走 第二十一回

文／藤森照信
Text by Fujimori Terunobu,
Photographs by Akiyama Ryoji
写真／秋山亮二

↑ 中庭

山口文象の自邸を見たい、と思った。昭和初期に始まる「木造モダニズム」の問題を考えるうえで、山口の存在は欠かせないからだ。

と、急にいわれても戸惑う読者のほうが多いだろうからあらためて説明すると、昭和初期に勃興した日本のモダニズム建築には、モダニズムをリードしたヨーロッパにはない興味深い課題があった。伝統の木造の一件で、1920年代初頭、ヨーロッパで誕生したモダニズム建築と日本の伝統的木造建築には共通点があり、それに気づいた日本の若い建築家たちがどう対応したか、という問題群である。

たとえば、アントニン・レーモンドは、ル・コルビュジエのプロジェクト案と日本の木造との接点を巧みに生かして名作「軽井沢夏の家」(33)をつくり、その直接的影響によって戦前の段階で「前川國男邸」(42)や丹下健三の実質的デビュー作「岸記念体育会館」(40)が生まれ、戦後になると吉村順三の名作「軽井沢の山荘」(62)が登場する、といったように日本のモダニズム建築は木造を経験するなかで柱と梁の軸組の美や屋根の意味を知り、そのことで初めてヨーロッパのモダニズム建築とは違う成果をあげ、世界的な評価を得ることができた。

もし、木造の伝統という細いまわり道を経なければ、世界の先端

3

食堂→

3／食堂と右側が庭。柱位置をのぞき用途も変わっている。当初は、木造の真壁造で、書斎となっていた。この上にロフトのようにした2階がのっていた。

2

2／中庭側からの全景。当初の面影を比較的よく留めている。切妻屋根をかけ、高いほうをロフト的な2階として住まい、低いほうは吹抜けの居間とする。切妻屋根とモダニズムとの共通性を発見したのはアントニン・レーモンドだった。

4

↑サロン

5

↑サロン

4・5／サロンと呼ばれる主室。当初はこの一角に囲炉裏が設けられ、大黒柱と太い梁がかかっていた。山口は社交的な人柄で、このサロンに文学者や絵描きや多くの文化人が集まった。

に届くことは難しかったにちがいない。

そうした関心からこれまで藤井厚二、堀口捨己、レーモンド、前川、丹下、吉村などの仕事を追ってきたが、山口文象には触れなかった。正確にいうと黒部川第二発電所（36）のような山口のモダニズム建築には関心を払ったが、木造には触れてこなかった。理由は「林芙美子邸」（41）のような木造住宅を見ても、どうとらえていいか糸口が見つからなかったからだ。伝統のままのような、そうでもないような、語る言葉が見つからない。

でも山口の日本の建築家では異例なモダニズム史上のカクカクたる〝武勲〟を振り返ると、放っておけない。なんせ、大正を代表する分離派からスタートしながら、その芸術至上主義に反旗をひるがえし、創宇社を結成して、日本の建築界に強烈な社会意識を吹き込んだのだった。やや建築界は離れるが、創宇社の〝子分〟たちが地下化した共産党の活動で投獄されるなか、建築家の表の顔と非合法メンバーとしての顔をからくも両立させながら、裏で唯物論研究会を支援しつづけたとか、戦後は戦後でGHQが共産党を非合法化したとき、代表の徳田球一が山口邸の庭先の付属棟に一時身を隠してから中国へ脱出したとか。

世界の建築と日本の歴史の激動のなかをからくも潜り抜けながら、

6

↑通路とスイッチ

6／通路にある昔からのスイッチ。

7／少し離れた敷地から曳家で運んだ初代山口邸。幅1・5間の横長のつくりは四畳半の連続体であり、日本の木造住宅の基本型のひとつといえる。下町の長屋を子どもの頃から体験的に見聞してきた山口ならではの住宅。ただしトラス小屋組も下見板張りの仕上げも伝統的ではない。

↑付属棟

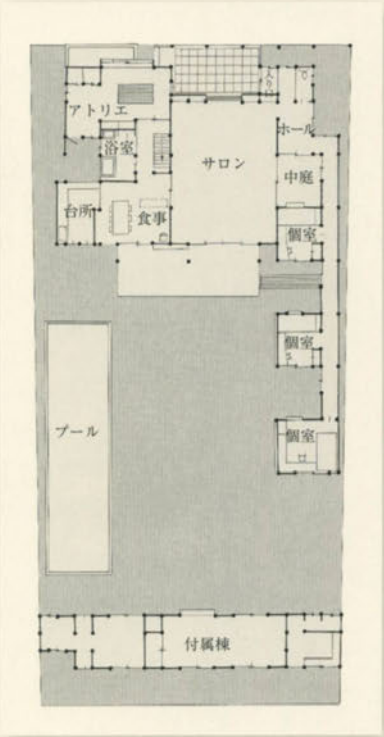
7

1/350

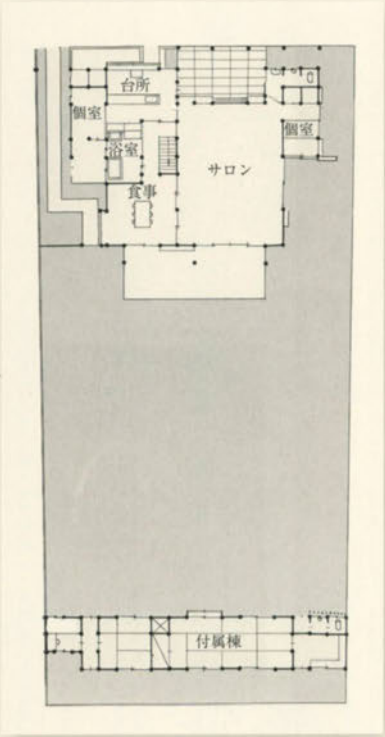
年代別1階平面図

0 2 4m

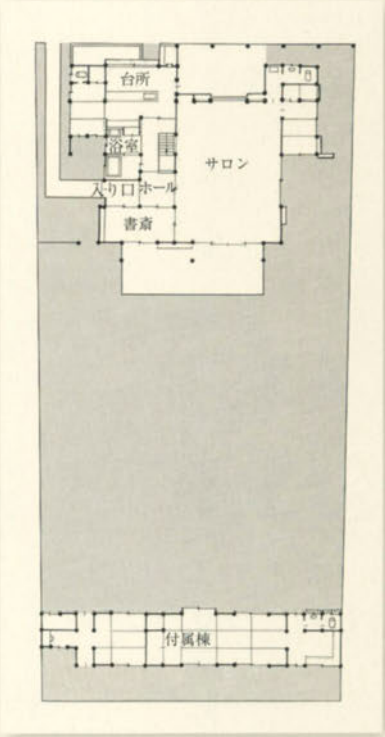
＊時代によってかなり変遷している。
現在は3つの個室はない。付属棟は南面に増築された。



1960年代



1950年代



1940年代

現代住宅併走

Yamaguchi Bunzo × Fujimori Terunobu

しかしそうしたあれこれについて確かなことはなぜか語らず、社会的にはモダンでオシャレで社交的な建築家でありつづけた。設計事務所の所長としてもすぐれ、戦後はRIAを結成し、近藤正一、植田豊、三輪正弘、渡辺豊和などを育てている。

こうした歴史上の〝武勲〟と林芙美子邸の普通の木造のイメージが一致せず困惑し、なんとかしなければと、山口文象邸探訪を決めたのだった。

場所は、戦前に開発された大田区は久が原の郊外住宅地。昭和15(1940)年に竣工し、今はご子息の勝敏氏が住んでおられる。

まず外観を見て、木造モダニズムと思った。理由は2カ所。ひとつは屋根で、広く平らな屋根が、ひとつの平らな面として道に向かって流れ下っている。前川國男の昭和10年代の作品に顕著に見られる木造モダニズムの特徴にちがいない。

もうひとつは側面で、片流れの屋根の下は、庭側が2階建て、道側は平屋で、平屋のほうは高天井の主室として使われているはず。レーモンドの軽井沢夏の家このかたの木造モダニズムの得意技ともいうべき空間のとり方。

しかし、竣工時の姿をなんとか偲ぶことができたのはここまでで、勝敏さんに案内されて中に入ると、その後の山口自身による改造によって、主室が高天井であったことを除くと、ほとんど旧状はわからない。残念。

庭に出てみると、広い庭のなかに旧状をよく留めるものがふたつ目に入る。ひとつは、戦後すぐにつくられたプール。あまり指摘されないことだがモダニズム建築とプールには関連性があり、レーモンドの軽井沢夏の家にも堀口の「若狭邸」(37)にも庭に小さなプールが設けられていた。モダニズムが求めた健康性と関係があるのだろう。

もうひとつは、徳田球一潜伏の別棟。じつはこっちのほうが古く、近くにあった山口設計になる初代山口文象邸からの曳家だという。スケール感の小ささがなかなか魅力的で、中に入るともっといい。今の若い女性の好みにピッタリ。しかし、スケール感の小ささを除くと、普通の木造にちがいなく、モダニズムの影響は認められない。

山口文象の家を巡して困惑は消えない。屋根と室内の空間のとり方はモダニズムだが、林芙美子邸的普通感がソココに漂うのだ。

語るべき言葉の見つからないまま竣工時の写真を広げ、室内の表現の中心をなす囲炉裏と太い柱と梁をボーッと見ていると、勝敏さんが、「父の兄の順造が施工してくれたのですが、兄貴はいい腕だろうって、いつも自慢してました」

そういえば、山口文象は下町の大工の息子で、若い頃、ノコギリやノミやカンナのトレーニングを受けたことを思い出した。大工の棟梁になるはずが建築家になった。兄は棟梁となり、弟のデザインした家をつくり、弟は自分のデザインよりも兄の木造の腕を自慢しつづけた。

このエピソードに私の思考は動きはじめる。太い柱と梁と囲炉裏、そして大工の伝統の腕前。この建築の奥には〝民家〟の存在があるのではあるまいか。しかし、モダンな感覚もある。モダンな感覚で洗われた民家。そうだ、柳宗悦が発見した〝民芸〟。

民芸の二文字を得て、やっと山口の木造が見えてきた。レーモンドや前川や丹下や吉村の木造との違いはそこにあったのだ。レーモンド以下は建築家としてまずモダニズムを学び、その後、日本の伝統木造に目覚めたのに対し、山口文象は伝統の木造を身につけてからモダニストになり、その後、再び木造と取り組んだ。山口の木造住宅はモダニズム建築ではなく、モダニズムの水で洗った伝統木造だったのではないか。今後はこの視点で山口の木造住宅に迫ってみよう。

8／中庭から見た初代山口邸。マッカーサーに追われた徳田球一が潜むにふさわしい立地といえよう。9／手前は駐車場となった隣地。右が道路、左も道路。山口邸敷地は道と道にかかるほど広いが、昔はこのへんでは一般的だったという。

山口文象邸

建築概要	
所在地	東京都大田区
主要用途	専用住宅
設計	山口文象
施工	山口順造
敷地面積	約600㎡
建築面積(竣工時1階)	
	約85㎡(母屋)、約39㎡(付属棟)
階数	2階
構造	木造
竣工	1940年
図面出典	
『新訂建築学大系38木造設計例』	
(RIAグループ著／1969／彰国社)	

山口文象

Yamaguchi Bunzo

1902年、東京は浅草の大工の子として生まれ、大工の学校に進むも、途中で建築家を目指す。23年、創宇社を結成し、分離派に続く建築家グループを率い、さらに新興建築家連盟の結成を図ったが、すぐ解散。建築家としては、グロピウス直伝の初期モダニズムの名作をいくつも手がけるが、よい状態で残るのは「黒部川第二発電所」(36)しかない。大工の素養を生かした伝統的な和風建築のほうは、「関口邸茶室」(34)、「林芙美子邸」(41)などがよい状態で残る。78年逝去。

藤森照信

Fujimori Terunobu

建築史家。工学院大学教授。東京大学名誉教授。専門は日本近現代建築史、自然建築デザイン。おもな受賞＝『明治の東京計画』(岩波書店)で毎日出版文化賞、『建築探偵の冒険 東京篇』(筑摩書房)で日本デザイン文化賞・サントリー学芸賞、建築作品「赤瀬川原平邸(ニラハウス)」(97)で日本芸術大賞、「熊本県立農業大学校学生寮」(2000)で日本建築学会作品賞など。

最新水まわり物語

Number 31

東京スカイツリー®

技術力に裏打ちされた世界一の高さにあるトイレ

取材 文／大山直美 写真／川辺明伸（外観写真 レストラン634内観 ポートレートを除く）

2012年5月22日、オープン前から大いに話題を呼んだ「東京スカイツリー」が開業した。東京・墨田区にある敷地内には、自立式電波塔としては世界 の高さを誇る地上634mのタワーを中心に、商業施設「東京ソラマチ®」や水族館、プラネタリウム、オフィス棟などが併設され、全体を総称して「東京スカイツリータウン」と呼ぶ。東京の東側にあたる下町に、一大観光スポットが誕生したことになる。東西約400m、南北約100mの細長い敷地はもと東武鉄道の貨物ヤードがあった場所で、事業主体は東武鉄道と東武タワースカイツリー、設計は日建設計。

東武鉄道の松井江真さんによれば、開発のコンセプトは「Rising East」。浅草や本所や向島を擁し、江戸の文化を支えた職人の精神や、路地園芸に象徴される下町の情緒を守りつづけたこの地ならではのコミュニティをさらに発展させ、新しい街づくりを目指したいという意図が込められているという。確かに、これまで大規模開発や新名所とは縁遠かった東京東部が「日出ずる国」になりうるビッグプロジェクトにちがいない。

さて、どんな施設にもつきものの トイレだが、今回は世界 の高さにある展望台のトイレと「東京ソラマチ」のトイレを取材した。

白色 空に一番近いトイレ

最初に向かったのは東京スカイツリー。展望台は地上350mと450mの2カ所にあり、前者の第1展望台は「天望デッキ」、後者の第2展望台は「天望回廊」と呼ばれている。

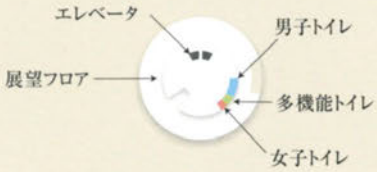
観光客は通常、まず天望デッキに着くそうだが、撮影の都合上、エレ

東京スカイツリー全景。
（写真提供／©TOKYO-SKYTREE）

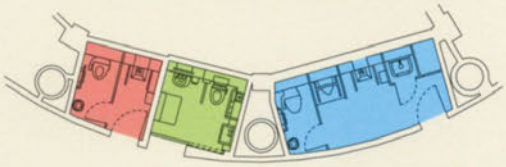
TOKYO SKYTREE / 450m

↑多機能トイレ

↑男子トイレ



女子トイレ／多機能トイレ／男子トイレ



0 1 2m 1/200

TOKYO SKYTREE / 350m

340m、345m、350mの3層からなる天望デッキのトイレ。トイレ内部は黒を基調に、壁の一部に江戸小紋の柄を取り入れた。男子トイレは青、女子トイレは紫。

男子トイレブース（上）、男子トイレ（中）、女子トイレブース（下）。

←女子トイレ

天望回廊（第2展望台）

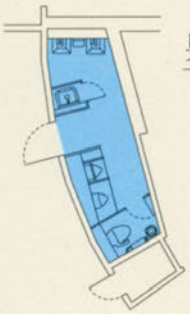
天望回廊は445mから一層上の450m地点までらせん状のスロープ。そのスロープを上りきった展望フロアにコンパクトに納められたトイレ。中央手てすりの奥に男子トイレ。白い扉奥が多機能トイレ、手前が女子トイレ。

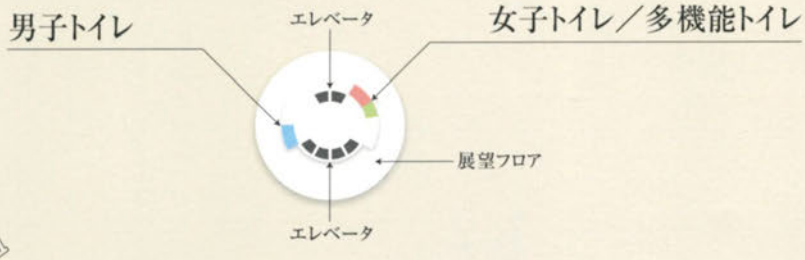
↑展望フロア

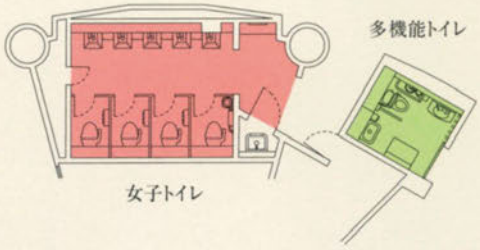
天望デッキ（第1展望台）

↑女子トイレ

↑多機能トイレ







0 1 2m 1/200

スカイレストラン634

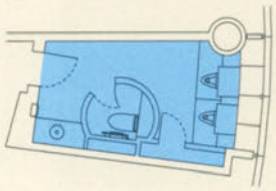
TOKYO SKYTREE / 345m

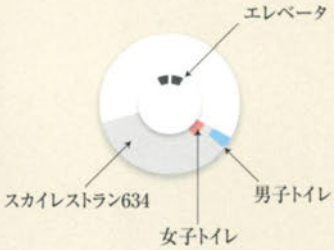
外に面した男子トイレ小便器コーナー。地上345mから、東京の街並みを一望しながら用を足せる。

↑男子トイレ小便器コーナー

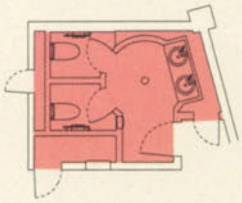
0 1 2m
1/200

男子トイレ





女子トイレ



↓女子トイレブース

↓女子トイレ

↓男子トイレ

写真左2点は、メタリックなモザイクタイルをストライプ状に張った女子トイレ。

ベータで　気に天望回廊に上がると、そこは445m地点。ここからもう1層上の450m地点までは、らせん状のガラス張りのスロープを歩いて上ることになるが、その回廊を上りきった所にトイレがあるのだ。

展望スペースの眺めを第一に考えた結果、男女トイレ、多機能トイレとも窓には面しておらず、広さも個数も最小限。設計を担当した日建スペースデザインの鈴木真弥さんは「上は緊急にどうしてもという人のために用意しました。だから、なるべく低層部のトイレですませていただきたいですね」と苦笑い。

また、トイレを含めた天望回廊の内装は白　色。その分、外の青空が冴え渡って見える。「空の色を中まで取り込みたかった。青空のときは青っぽく、夕方はオレンジがかって見えるんです」と鈴木さんは語る。

方、天望デッキは正確には340m、345m、350mの3層からなり、最初にエレベータが着くのが地上350mにあるフロア。このフロアのトイレは内装に合わせてトイレ内部も黒を基調にしており、壁の一部に江戸小紋の柄を取り入れている。男子トイレに青、女子トイレに紫を選んだのは、タワーの夜のライティング「粋」と「雅」のテーマカラーに合わせたものだという。

空に向かう男子トイレ

次に、地上345mのフロアにある「スカイレストラン634（ムサシ）」のトイレを見学した。絶景が自慢で完全予約制の高級レストランだけに、トイレも一見の価値がある。

メタリックなモザイクタイルをストライプ状に張った、円筒形の洗面コーナーが目を引く女子トイレも美しいが、注目はタワー内で唯　、外に面した男子トイレ。ふたつ並んだ小便器の背後に開口部があり、東京の街並みを　望しながら用を足すことができる。設計を手がけた永合（なごう）貴之さんいわく、「店内の内装がわりとシンプルなので、トイレぐらい、ちょっと変えて驚かせたいと思いました。女子トイレは限られたスペースにブースと洗面を配置することになるので、外に向かって開けるなら男子トイレしかないと」。

安全性と使いやすさを検証

最後に、「東京ソラマチ」のトイレを見学した。全長400mにもおよぶ商業施設だけに、トイレを分散して配置する必要があり、全部で26のトイレを設けたとのこと。撮影した6階レストラン街には3カ所にトイレがあり、うちメインエレベータのそばには多機能トイレもある。

内装は木質系の柱型と櫛引きの漆喰調の白壁を基本にした、あたたかなイメージ。洗面コーナーもパウダーコーナーも柱型で個別に仕切られているので、ゆったり落ち着ける。設計を担当した日建設計の皿海（さらがい）博章さんによれば、色合いは各フロアの内装に合わせて、下から上へ行くに

東京スカイツリー®
TOKYO SKYTREE

建築概要

所在地	東京都墨田区押上1-1-2
主要用途	電波塔、展示場、物販店舗、飲食店舗、駐車場
建て主	東武鉄道、東武タワースカイツリー
設計監理(全体)	日建設計
設計(トイレ)	日建スペースデザイン(タワーヤード)
	日建設計(イーストヤード/ウエストヤード)
施工	大林組(タワーヤード)
	大林・株木　東武建設共同企業体(イーストヤード)
	大成建設　東武谷内田建設共同企業体(ウエストヤード)
敷地面積	36,844.39㎡
建築面積	32,221.47㎡
延床面積	229,728.92㎡
構造	鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造
設計期間	2006年4月～2008年6月
施工期間	2008年7月～2012年2月(タワーヤード)
	2009年3月～2012年2月(イーストヤード/ウエストヤード)

おもなTOTO使用機器

タワーヤード展望台

男子トイレ	大便器C516P+TCF584特
	小便器UFS800CE
	洗面器L120
女子トイレ	大便器C516P+TCF584特
	洗面器L120
多機能トイレ	RESTROOM ITEM 01 XPDA(オストメイトあり)

スカイレストラン634

男子トイレ	大便器ネオレストAH CES9896特
	小便器RESTROOM ITEM 01 XPU11
	洗面器L530
女子トイレ	大便器ネオレストAH CES9896特

イーストヤード/ウエストヤード

男子トイレ	大便器C516P+TCF584特
	小便器UFS800CE
	洗面器L130
女子トイレ	大便器C516P+TCF584特
	洗面器L130
多機能トイレ	大便器C516P+TCF4521特
	オストメイトUAS(オストメイト対応トイレパック)
	洗面器L270D

東武鉄道 生活サービス創造本部 SC事業部 松井 江真 Matsui Emi

日建設計 設計部門 設計部主管 皿海 博章 Saragai Hiroaki

日建スペースデザイン 東京設計室 シニアデザイナー 鈴木 真弥 Suzuki Shinya

日建スペースデザイン 東京設計室 シニアデザイナー 永合 貴之 Nago Takayuki

東京ソラマチ®
TOKYO SOLAMACHI

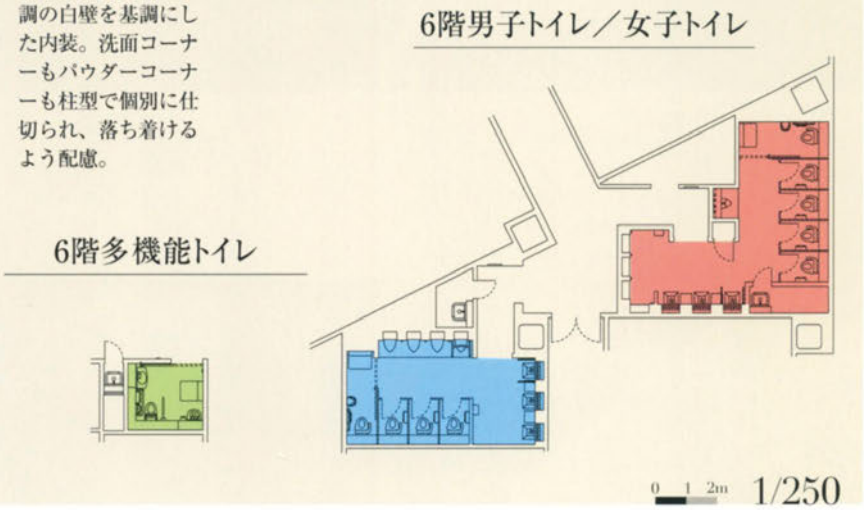
↑男子トイレ

↑多機能トイレ

↑女子トイレ

↑女子トイレブース

木質系の柱型と漆喰調の白壁を基調にした内装。洗面コーナーもパウダーコーナーも柱型で個別に仕切られ、落ち着けるよう配慮。



つれて濃くなっているという。

「デザイン性だけでなく、床のタイルがすべったりしないかなど、安全性を重視する一方、パウダーコーナーの棚の高さや形状なども使いやすいように配慮しました」と語るのは東武鉄道の松井さん。皿海さんも「洗面台の脇には荷物が置ける台を設け、パウダーコーナーにもポーチが置ける台や買い物袋を掛けるフックを設けるなど、細かい点にも気を配りました。社内の女性スタッフが自社でこれまでに設計した都内のビルや百貨店のトイレをまわって棚の高さなどを計測し、そのデータをもとに、東武鉄道さんと情報を共有しながら進めました」と振り返る。

超高層からの排水処理

ところで、今回、とくにタワーのトイレに関しては、標準的な装備という印象だったが、後日、トイレの排水について興味深い話を聞いた。排水には加速度が生じるため、タワーや超高層ビルの場合、真下にそのまま流すと排水管内の空気が押し出されて真空状態になり、便器内の封水まで引き込まれて悪臭の原因になるという。そこで、排水管に折り曲げ部を設け、落下速度を減速させることで封水切れを防いでいるのだそうだ。特殊な機器や配管を使わず、段階的な継ぎ手で対処することで、メンテナンスに余計な手間やコストをかけずにすむメリットもある。

超高層ビルを数々設計している日建設計にしてみれば常識なのだろうが、普通に見えたトイレがじつは普通ではないことに気づかされる思いだった。地上からはるか離れた高所にありながら、地上となんら変わらず、快適に使えるトイレは、高さだけでなく、世界に誇る技術力に支えられているといえるだろう。

最新水まわり物語

Number 32

バルコニーの先に皇居外苑の緑が広がるホテル

パレスホテル東京

取材 文／大山直美 写真／川辺明伸（外観写真とポートレートを除く）

↑グランドデラックス

写真下／和田倉濠に面したバルコニーとバスルーム。皇居外苑の緑が広がる。

写真上／55㎡のグランドデラックス。シックでニュートラルな内装。

↓バルコニーとバスルーム

千代田区丸の内1-1-1。和田倉濠の水辺と石垣、皇居外苑の緑が眼前に広がる 等地に2012年5月17日、「パレスホテル東京」がオープンした。建物は築48年の旧ホテルを建て替えたもので、以前と同じくホテルとオフィスの2棟構成。かつて地上10階建て、客室数389室だったホテルは、地上23階建てとなり、すべて45㎡以上を確保したゆとりの客室290室をはじめ、レストラン、宴会場、結婚式場、スパなどをフル装備したラグジュアリーホテルに生まれ変わった。

客室も宴会場もお濠側に開く提案

「パレスホテルはこれまで、どちらかといえば財界の方々に多くご利用いただいていて、若い人には使いにくいという声もあったので、建て替えにあたり、若い方々が来られるホテルにしたいというのがまず最初のコンセプトでした」と、パレスホテルプロジェクト室の諸井徹さんは

外観（写真提供／パレスホテル東京）

客室 グランドデラックス

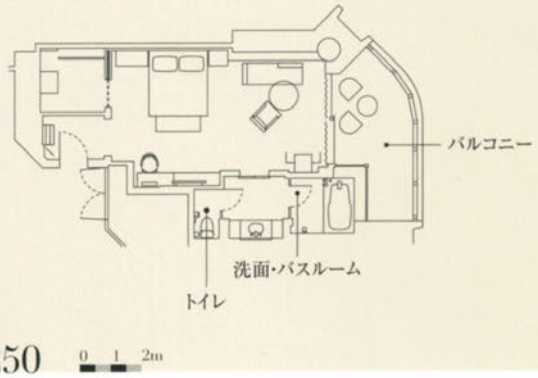
バルコニーに向かって突き出すように配置されたバスルーム。景色を堪能できる。

↑バスルーム

↓トイレ

↓洗面・バスルーム

写真右／洗面所からバスルーム越しに外を見る。グランドデラックスのバスルームは、洗い場付きのタイプが採用されている。写真左／洗面カウンターの脇に独立して設置されたトイレ。



語る。

全体計画とオフィス棟の設計は三菱地所設計が手がけ、ホテルについては大手設計事務所数社によるコンペを実施したが、結局ホテル棟も三菱地所設計の案が選ばれたという。同社建築設計五部の大草徹也さんはこう振り返る。

「パレスホテルは株主総会などの大規模宴会利用が多く、1200㎡の大宴会場や600㎡の中宴会場を要するため、それと客室やほかの施設をどう複合させるかが課題で、何十案も模型をつくって検討しました。眺めのよいお濠側に宴会場を配し、背面に客室をもってくるとか、客室で囲まれた中央に宴会場を配するというのが一般的に考えられるプランですが、それでは他社に勝てない、もっと思い切ったことをやろうと考えたんです」

その結果、編み出したのが、客室のある高層部の真下に宴会場を配し、高層部を支える柱を宴会場の両サイドにふり分けるというスーパーフレーム構造を採用した提案。これにより、大宴会場、中宴会場、チャペルなどの大空間に大開口を設けられるばかりか、客室の3分の2にお濠に面したバルコニーを設けることが可能になった。さらに、高層部を湾曲させることで和田倉噴水公園から見た圧迫感が軽減されると同時に、低層部に多様なテラスも設けることができた。諸井さんによれば、満場一致で三菱地所設計案が選ばれたそうで、全体計画からかかわってきた同社の意気込みを感じさせる。

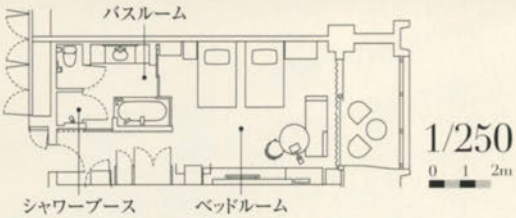
パレスホテル東京

客室 デラックス

↑シャワーブース

↓バスルーム

写真上／トイレの隣に設置されたシャワーブース。写真下／バスルームとベッドルームは、ブラインドと引き戸で視線を遮ることもできる。



↓ベッドルーム

写真上／45㎡のデラックスのバスルームは、ベッド越しに外を眺められる配置。写真右／ベッドの右手にバルコニー。左手にバスルーム。

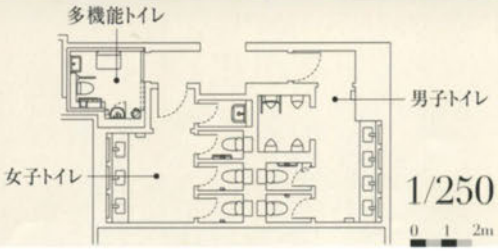
パレスホテル東京

パブリックトイレ

↑入り口

↓女子トイレ

写真上／お濠の石垣の借景が美しいエントランスロビーの雰囲気そのままの、パブリックトイレの入り口。写真下／女子トイレのブース。



↓多機能トイレ

写真上／男子トイレ。黒を基調にし、照明も適度に抑えた、ホテルらしい上質な空間。写真右／REST-ROOM ITEM 01が採用された多機能トイレ。

ここでしか味わえないぜいたくな眺め

今回、実際に見学した客室は、標準的な45㎡の「デラックス」と、55㎡の「グランドデラックス」。いずれも和田倉濠に面してバルコニーがあり、室内と一体になったバルコニーの先には、皇居外苑の豊かな緑が広がっている。まさに、ここでしか味わえないぜいたくな眺めといえるだろう。

「以前は、いわゆる『裏部屋』という景色があまりよくない部屋があって、そこにシングルを集中させたりしていたのですが、今回はそれもいっさいやめて、すべての部屋から景色が見られるようにしようというのが三菱地所設計案の最大のポイントで、それがわれわれの意向と一致したんですね」とは諸井さんの弁。

「デラックス」はバルコニー側にベッドルーム、廊下側に水まわりを配したプラン。バスルームは洗い場をなくし、シャワーブースとトイレを独立させている。バスタブは窓には面していないがL字形に囲った間仕切り壁がガラスなので、ベッドルーム越しに外を眺めながらお湯に浸かることもできる。視線を遮りたいときのために、L字形のガラス面の外側には電動の木製ブラインド、ベッドルームと洗面所の境には引き戸が仕込んであり、プライバシー対策は万全だ。

一方、「グランドデラックス」は洗い場付きのビューバスを備えたタイプで、ちょうど湾曲した建物に沿って雁行した部屋が連続しているうちの一室にあたる。その雁行した角に浴室を配してあるため、ガラスの壁で囲まれたバスタブの角が広いバルコニーに向かって突き出しており、L字形に開いた2面の開口部から景色が堪能できる。

どちらも内装は、ことさらに和を強調することなく、シックでニュートラルな印象だ。ちなみに、インテリアデザインはイギリスのデザイン事務所、GAデザイン・インターナショナルが行い、日本における設計監理をメック・デザイン・インターナショナルが担当。大草さんによれば、構造に影響する浴室の位置など、大まかなプランニングは三菱地所設計で決定した後に、3社でかなり細かい打ち合わせをしながらデザインを固めていったという。

「最初にわれわれがまず考えたのは、バルコニーの立ち上がりを出さず、できる限りフラットにすることで、日本の縁側のように内と外が一体になる空間にしたいということでした。GAが考えたあの突き出した形状をした浴槽は、まさに外と中、部屋と浴室を視覚的に一体に見せようとする斬新な発想で、非常におもしろいと思いましたね。ただ、あれだけ大型で不整形なお風呂をユニットでつくるわけですから、TOTOさんは目に見えないところで相当ご苦労されたと思います」と大草さん。

最後に、お濠の石垣の借景がみごとなエントランスロビーの脇にある、共用のトイレも見学した。黒を基調にし、照度も適度に抑えた、ホテルらしい上質な空間だ。

ここで、諸井さんからTOTOの器具のデザインについて率直な要望をいただいた。

「ウォシュレットのリモコンにいいのがなく、パブリックトイレも客室のトイレも、そこだけは妥協せざるをえませんでした。スティックタイプの製品はデザインはモダンですが、水を流すボタンがわかりにくく、お年寄りや外国の方はどれを押せばいいかわからない。しかたなく、後で目印のシールを張ったりしている例をよく見かけます。かといって、さまざまな身体状況の方のための操作性最優先のリモコンは、ホテルのインテリアにはそぐわないデザインです。便器自体は世界に誇れますが、日本のTOTOが生んだウォシュレットだからこそ、TOTOでしか開発できないんです。もっとユニバーサルで使いやすく美しいものを誰もが待ち望んでいるのではないでしょうか」

単なる批判ではなく、開発者への力強いエールとして、真摯に受けとめたい。

↑エントランスロビー

パレスホテル東京

PALACE HOTEL TOKYO

建築概要

所在地	東京都千代田区丸の内1-1-1
主要用途	ホテル（事務所棟は「パレスビル」）
事業主	パレスホテル
設計監理（建築）	三菱地所設計
設計（インテリアデザイン）	GAデザイン インターナショナル、メック・デザイン・インターナショナル、デザインポスト、A.N.D.、GJF
施工（建築）	大林組
施工（衛生）	須賀工業
敷地面積	約10,440㎡
延床面積	約62,000㎡
構造	鉄骨造（地上）、鉄骨鉄筋コンクリート造（地下）
階数	地下4階、地上23階
竣工	2012年2月
開業	2012年5月17日
客室	290室、全室45㎡以上（デラックス45㎡、グランドデラックス55㎡、スイート75〜210㎡）

おもなTOTO使用機器

客室

大型特殊ユニットバス
水栓：Sシリーズ特
浴槽：いものホーロー特
大便器：ネオレストD特

低層部のパブリックトイレ

大便器　ネオレストD特
水栓：壁付自動水栓
多機能トイレ：RESTROOM ITEM 01特

パレスホテル
プロジェクト室
室長
諸井 徹
Moroi Toru

三菱地所設計
建築設計五部長　兼
海外プロジェクト室長
大草徹也
Okusa Tetsuya

(株)藤島建設

Fujishima custom wood construction Co.,Ltd.

「建てた後」こそ大切に　地域密着の信頼感

代表取締役社長　佐藤善之さん

埼玉県川口市に本拠を構える藤島建設。60人を超える従業員を率いる佐藤善之さんは、「従業員と呼ぶのは嫌いなので」、従業員のことを「スタッフ」と呼ぶそうだが、そのスタッフとの距離感に独特のものがある。

もちろんスタッフとはいっても自社の従業員であることに変わりはないから、きびしく指導するスタンスはゆるがないが、一方で指示する、従うという関係でなくそれぞれが「自分で成長する」ことをうながすようなサポートをさりげなく行う。そこに、何かスタッフに対する敬意のような、独特の雰囲気を感じさせるのである。

口コミで広がる「安心」が信頼につながっていく

藤島建設が手がける住宅は、年間約200棟。その大半がさいたま市・川口市を中心とした地域に建てられる。原則として、車で1時間、遠くても1時間半が目安。「それ以上遠くになると、維持管理のお手伝いが難しくなる。家は建てて終わりではないから」というのがその理由だ。地域密着を貫いて、50年間に約1万5000棟を建ててきた。

だからこそ、と言っていいだろう。スタッフはもちろん、協力業者に至るまで、マナーの徹底が図られる。現場に入る際には、すべての人が顔写真入りの藤島建設会員カードを入り口に掲示し、誰が作業しているかを明示する。下請け、孫請けに丸投げしないポリシーを明確にし、全員が藤島建設の看板を背負っている自覚のもとに作業にあたる。個人の顔を「見せる」ことで、作業する人の責任感も強くなる。現場が始まる前、使用する材料が加工される日時を建て主に知らせ、さいたま市内の自社のプレカット工場で加工の様子を見せるのも、同様に仕事の「見える化」の　環である。

「木材を用意してもらう岩手の葛巻町も含めて、すべての作業をお客さまに見てもらうことで安心を提供したいんです。狭い地域でやっていますから、口コミや評判はとても大切ですし、それは次の仕事にもつながる」

毎年行う「秋の感謝祭」には、設計や現場が進行中の人たちだけでなく、大勢のOBのお施主さまたちも集まって、「同窓会みたいな」様相を呈する。竣工後もお施主さまの家族と途切れない関係を築いていくための重要

写真はすべて藤島建設の街角展示場「atelier-F」。「かしこい家 スマートハウス」を目指した「atelier-F」は、Q値1.76の断熱性や太陽光発電システムのほか、地中熱を利用するジオサーマルシステムも採用した「ゼロエネルギー住宅」。写真上／吹抜けのリビングに立つ社長の佐藤善之さん。右／1階トイレ。左／玄関から和室を見たところ。

今、住宅会社の動きから目が離せない。
活動領域はさまざまだが、
それぞれの土地柄、会社の性格、
そして会社をリードする人物の性格、
マーケティング戦略……。
これは、その個性的な活動で
地域に生きる会社のドキュメント。

Fujishima custom wood construction Co.,Ltd.

Data

㈱藤島建設
●本社所在地
埼玉県川口市南前川2-14-12
●電話
048-265-8888㈹
●代表取締役社長
佐藤善之
●創業
1959年
●会社設立
1962年
●従業員数
66名
●事業内容
住宅　店舗などの総合建築業の設計　施工　監理、およびコンサルティングならびに、不動産の売買　仲介　管理
●売上高
38億8,000万円(2012年4月期)
●関連会社
㈱藤島住宅
●URL
www.fujishima.co.jp/

TOTO使用機器
●トイレ(1階)
ウォシュレット一体形便器GG
●トイレ(2階)
組合せ便器CFS391BA
●浴室
サザナHBシリーズ
●洗面
ラパトリードレッサーSQシリーズ

Fujishima custom wood construction Co., Ltd./Sato Yoshiyuki

佐藤善之（さとう　よしゆき）／1967年東京都生まれ、埼玉県育ち。90年立教大学法学部卒業。不動産会社勤務後、藤島建設入社。04年より代表取締役社長。08年よりいわて文化大使、NPO環境住宅理事も務める。地元埼玉中心に、優良な木造住宅を提供しつづけるため、木材も職人さんも自社で育成。すべてに目配りし、堅実、健全経営を目指す。

な取り組みだ。修繕や改修の相談先、依頼先として関係を保つのはもちろんだが、むしろ建てた後の満足感を持続させることに意味がある。満足感が長く続けば、よい評判は自然に、着実に周囲に広がっていく。

「正しい仕事」を続けるための客観的な視点

佐藤さんの父・佐藤作彌氏が、藤島建設の前身、佐藤工務店を立ち上げたのは1959年。住居と事務所、下小屋も一緒だったという家に生まれた佐藤さんは、小さい頃から現場にも職人たちにも慣れ親しんで育った。だが、学校は建築専攻ではなく法学部に進み、卒業後は不動産関係の会社に就職。バブル期、「ジャパンマネー」を手に、世界を相手に仕事をした。2004年、現在の藤島建設を引き継いで社長に就任したが、それ以前の経験は貴重なものだったという。

「建設会社ですから建築の専門家はたくさんいる。でも、法律の専門家はいませんから、その意味では法学部に進んでよかった。就職先では、財務の仕事をやっていましたが、いろいろなお金の動きも見られて、すごく勉強になりましたね」

ずっと藤島建設を知っているが、建築の技術者ではない。その分、客観的に建設業も建設会社も見ることができる。そんな独特の視点から、佐藤さんは複眼的に会社を見つめているのかもしれない。だから、スタッフへの敬意のように感じられたのは、多様な建て主たちと向き合う建築のプロフェッショナルたちへの敬意なのだろう。自らは経営のプロとして、「正しい仕事」をみんなができる環境をつくる。スタッフはそのなかで、建築のプロの誇りをもって仕事をしてほしい。藤島建設の活動は、佐藤さんの熱い思いと広い視野に導かれて、地域に深く根ざし、広がりつづけている。

取材　文／市川幹朗　写真／山下恒徳

写真左上／道路側外観。中3点／上から、1階洗面室、1階浴室、2階トイレ。

写真左／2階多目的洋室。自然素材を使い、生活の変化に合わせられるフレキシブルな構成。民家の基本形を継承し、経年変化の早い水まわりを下屋にまとめる。

「秋の感謝祭」の様子。昨年は1,400人もの人が集まった。かつてのお施主さまたちも大勢来場し、あちこちで話に花が咲く（写真提供／藤島建設）。

「ここに、建築は、可能か」

第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 日本館帰国展

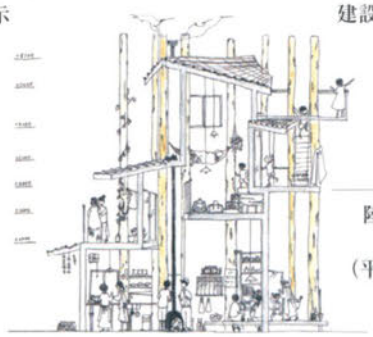
東日本大震災の現実を目の当たりにして、
今、建築家に何ができるのか。
陸前高田の「みんなの家」での実践を通して、
これからの建築のあり方を考える。
ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展
「金獅子賞」受賞の日本館展示、凱旋帰国展。

Architecture, Possible here? "Home-for-All"
Homecoming Exhibition of the Japan Pavilion
from the 13th International Architecture Exhibition
La Biennale di Venezia

第13回ヴェネチア　ビエンナーレ
国際建築展日本館展示
写真／畠山直哉

陸前高田の「みんなの家」
建設現場（2012年8月14日撮影）
写真／畠山直哉

陸前高田の「みんなの家」
建設現場（2012年9月13日撮影）
写真／伊東豊雄建築設計事務所



陸前高田の「みんなの家」
最終案スケッチ
（平田晃久建築設計事務所）

ヴェネチア・ビエンナーレ日本館帰国展への期待

文／伊東豊雄（建築家）

昨年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展において、日本館は金獅子賞を獲得した。建築界のオリンピックといわれる祭典で最高の栄誉である金獅子賞を獲得できたのは、3・11に直面した後の建築のあるべき姿を世界に問うたからにほかならない。

私は日本館のコミッショナーとして、極小の建築を通じて極大の問題提起をした。極小の建築とは、被災地につくり続けている「みんなの家」と呼ぶコミュニティハウスを指す。また極大の問題提起とは「今、建築とは何か」という最も原初的、かつ本質的問いかけを指す。

われわれ日本人建築家は、あの悲惨なカタストロフィを教訓として、これからの建築やまちのあり方を根底から問い直すという大きな課題を担っている。逆の言い方をすれば、このテーマは、日本人建築家だけに課せられたまたとない機会、ともいえるのである。

このテーマを考えるために、私は3人のすぐれた建築家、乾久美子さん、藤本壮介さん、平田晃久さん、そして写真家の畠山直哉さんとともに約1年間議論をくり返した。そして畠山さんの出身地である岩手県陸前高田市に1軒の「みんなの家」を建てることを前提に、そのスタディのドキュメントを畠山さんの写真とともに展示した。

この展示には従来の建築展とは違ったいくつかの特徴がある。まず3人の建築家がそれぞれの提案をするのではなく、共同作業によってひとつの建築を設計するという点にある。これは決して容易なことではない。しかしこの難問に対し、3人の建築家は百数十のスタディモデルをつくって、じつにエネルギッシュに応えてくれた。そして三人三様に納得のいくモデルに収斂していった。収斂し得たのは3人

The Next Exhibition at TOTO GALLERY・MA

次回予告

中村好文展(仮)

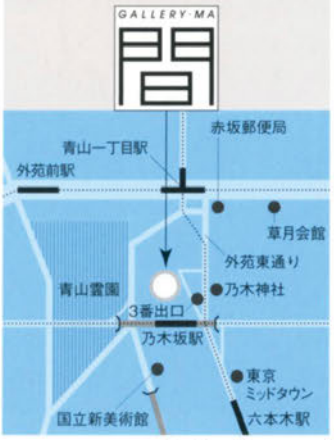
心地よい住宅の設計で知られる建築家、中村好文（なかむら・よしふみ）氏の展覧会を開催いたします。
今回の展覧会では、住宅の原点である「小屋」をテーマに、中庭に実物大の小屋を仮設し、空間を体感していただきます。また、氏が影響を受けた古今東西の小屋から、自身が手がけた小屋的な作品までを模型やスケッチ、写真などで紹介します。

会期	2013年4月18日(木)～6月22日(土)
講演会	2013年4月25日(木)／建築会館ホール ※事前申し込み制 詳細は2月中旬、TOTOギャラリー　間ウェブサイトをご覧ください。

TOTO ギャラリー・間

↓

所在地	東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル3階
電話	03(3402)1010
ファクス	03(3423)4085
開館時間	11:00～18:00（金曜日のみ11:00～19:00）
休館日	日曜日・月曜日・祝日、および展示替え期間 ※2013年3月11日(月)は開館
入場料	無料
アクセス	●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車 3番出口徒歩1分 ●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車 7番出口徒歩6分 ●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車 4a番出口徒歩7分 ●東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車4番出口徒歩7分



www.toto.co.jp/gallerma/

コミッショナー　伊東豊雄／建築家

いとう・とよお／1941年大韓民国京城市（現ソウル市）生まれ。65年東京大学工学部建築学科卒業。71年アーバンロボット設立。79年伊東豊雄建築設計事務所に改称。第22回高松宮殿下記念世界文化賞ほか、国内外の受賞多数。

参加作家　乾 久美子／建築家

いぬい・くみこ／1969年大阪府生まれ。92年東京藝術大学美術学部建築科卒業。96年イエール大学大学院建築学部修了。青木淳建築計画事務所勤務の後、2000年乾久美子建築設計事務所設立。現在、東京藝術大学准教授。

参加作家　藤本壮介／建築家

ふじもと・そうすけ／1971年北海道生まれ。94年東京大学工学部建築学科卒業。2000年藤本壮介建築設計事務所設立。

参加作家　平田晃久／建築家

ひらた・あきひさ／1971年大阪府生まれ。94年京都大学工学部建築学科卒業。97年同大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年平田晃久建築設計事務所設立。現在、東北大学特任准教授。

参加作家　畠山直哉／写真家

はたけやま・なおや／1958年岩手県陸前高田市生まれ。筑波大学芸術専門学群にて大辻清司に薫陶を受け、84年同大学院芸術研究科修士課程修了。以降、東京を拠点に活動を行い、自然・都市・写真のかかわりあいに主眼を置いた一連の作品を制作。

シンポジウム

誰のために建築は建てられるのか——「みんなの家」から学んだこと

出演者●内藤 廣（モデレーター）／伊東豊雄／乾 久美子／藤本壮介／平田晃久
日時●2013年3月11日(月)17:30開場、18:30開演、21:00終演（予定）
会場●津田ホール（東京都渋谷区千駄ヶ谷1-8-24）
定員●490人／参加無料
参加方法●事前申し込み制。TOTOギャラリー・間ウェブサイト（www.toto.co.jp/gallerma/）よりお申し込みください。
申し込み期間●2013年1月11日(金)～2月17日(日)
抽選のうえ、2月28日(木)までに結果をご連絡いたします。

シンポジウム　モデレーター　内藤 廣／建築家

ないとう・ひろし／1950年生まれ。早稲田大学大学院修士課程修了後、フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所、菊竹清訓建築設計事務所を経て、81年内藤廣建築設計事務所設立。現在、東京大学名誉教授、総長室顧問。

陸前高田の「みんなの家」上棟式
（2012年8月7日撮影）
写真／畠山直哉

陸前高田の「みんなの家」
最終案模型
写真／畠山直哉

の努力によるのは言うまでもないが、そこに介在した畠山さんや、現地でこの家を受け入れる菅原みき子さんの力が大きかった。ふたりは被災の当事者として、折にふれて失われたまちへの想いを語り、3人の想像力をかきたててくれた。

どのように展開されていくのか予測のつかないプロジェクトのプロセスを展示するという企画は、スリリングであると同時に、多くのリスクが伴う。しかも陸前高田では「みんなの家」の建設が始まり、展示工事と「みんなの家」の工事現場がパラレルに進行するという異常な状態に立ち会うことになった。

幸い日本館での展示は、同時進行したがゆえに、工事現場の迫力をそのまま会場でも伝えることができたように思う。建築展はほとんどの場合、現実に建てられる建築が、モデルや図面、写真のメディアによって紹介される。いかにがんばっても、生の建築のもつ力をそのまま伝えることは不可能である。しかし、今回は同時進行によって、展示会場に工事現場そのままのリアルな風景を持ち込むことができたのではないか。

1月から開催するTOTOギャラリー・間での帰国展も、恐らくヴェネチアの再現とはならないだろう。陸前高田の「みんなの家」は11月にはとりあえず竣工し、使われはじめる。そこからまたこの家は、陸前高田の人々にとっての「生きられる家」として、新たなドキュメントがスタートするにちがいないからである。そのドキュメントがどのような新しい展示を生み出すのか、今から楽しみである。

TOTOの最新情報

TOTO News 1

「TOTOテクニカルセンター」「TDY 東京コラボレーションショールーム」南新宿にグランドオープン！

専門家のお客さまとTOTOがコラボレーションし、最新の水まわり空間を創造する場である「TOTOテクニカルセンター」と、リモデル情報発信拠点の旗艦ショールーム「TDY 東京コラボレーションショールーム」が「JR南新宿ビル」にグランドオープンしました。

TOTOテクニカルセンター

JR南新宿ビル 6F

日々進化するTOTO独自の技術を紹介する「技術展示コーナー」、図面上のプランを実物大で再現し、使い勝手が確認できる「ラボコーナー」、建築用途に合わせた理想的な水まわり空間を紹介する「用途別空間展示スペース」、さらにTOTOの過去と未来をつなぐ「ブランドコーナー」では、各時代を代表する水まわり空間の事例と、TOTOの歴史や代表的な商品を紹介しています。専門家のお客さまにご活用いただける施設ですので、ぜひご利用ください。

TDY 東京コラボレーションショールーム

JR南新宿ビル 7F+8F

TOTO・DAIKEN・YKK AP 3社（以下TDY）のリモデルに関する情報発信の拠点となる旗艦ショールームとして、全国のコラボレーションショールームのなかでは最大規模のスペースを誇る約1,115坪。マンションリモデルの事例など「TDY グリーンリモデル空間展示」を中心とした3社の連携でお客さま満足度をさらに追求していきます。ぜひ、ショールームへ足をお運びください。

●所在地／東京都渋谷区代々木2-1-5 JR南新宿ビル ●営業時間／10:00～17:00 ●アクセス／JR新宿駅サザンテラス口から徒歩4分、都営新宿線・大江戸線 京王新線「新宿駅」A1出口より徒歩2分
［TOTO テクニカルセンター（6F）］
●電話／03（5309）2700 ●ファクス／03（5309）2701 ●休館日／土曜日 日曜日・祝日・夏季休暇・年末年始 ●申し込み方法（予約制）／お客さまに十分に施設をご活用いただくため、ご利用については予約制とさせていただいております。当社営業担当を通じてお申し込みください。
www.com-et.com/ttc/
［TDY 東京コラボレーションショールーム（7F+8F）］ ●電話／0120（43）1010 ●ファクス／03（5309）2783 ●休館日／毎週水曜日（祝日除く）・夏季休暇・年末年始

写真左／TOTOテクニカルセンター6階技術展示コーナー。
中／6階ブランドコーナー。
右／TDY 東京コラボレーションショールームの空間展示コーナー。

TOTO News 2

「ダウ・ジョーンズ・サステナビリティ・ワールド・インデックス」の構成銘柄に2年連続で選定

TOTOは、世界的な社会的責任投資（SRI※1）指標である「ダウ・ジョーンズ・サステナビリティ・ワールド・インデックス（DJSI＝Dow Jones Sustainability World Indexes）」の構成銘柄に2年連続で選定されました。DJSIは、米国ダウ・ジョーンズ社（※2）とスイスの社会的責任投資に関する調査専門会社SAMグループが提携して開発した指標で、経済・環境・社会の3つの側面で、社会的責任を果たしているかどうかが評価対象です。今年度は世界約2,500社のなかから、340社が選定されました。TOTOは、2017年の創立100周年に向けて、ESG（環境・社会・ガバナンス）視点で企業活動を推進し、"真のグローバル企業TOTOへ" 進化すべく努力してまいります。

※1: 社会的責任投資（SRI）とは、投資を行う際に、従来の財務分析による投資基準に加え、社会・環境・コーポレートガバナンスといった企業の社会的責任や貢献を重視して投資をする方法。
※2: ダウ・ジョーンズ社は世界的にも主要となっているアメリカの経済新聞「The Wall Street Journal」などを発行する経済ニュース通信社。アメリカの代表的な株価指数「ダウ・ジョーンズ工業株価平均（通称:ダウ平均）」を算出していることでも有名。

TOTO News 3

2013年版 TOTOドローイングカレンダーをご紹介します

今年のカレンダーは、チューリヒに事務所を構え活躍する気鋭の建築家クリスチャン・ケレツ氏の建築ドローイング集をお届けします。氏は、個別かつ繰り返されることのない現実の条件に即しながら、建築の純粋性を追求。柱や梁などシンプルな要素によって表現された空間は、秩序と無秩序、安定と不安定、閉ざされたものと開かれたものなど相反する特徴をひとつの全体としてまとめあげたダイナミックなものであり、現代建築に対する示唆に富んでいます。今回のカレンダーでは、TOTOギャラリー・間での展覧会に先駆けその一部をご紹介します。

*2013年7月には、TOTOギャラリー・間（東京・乃木坂）で日本初の個展を開催、氏の来日講演会を予定しております。

Present

2013年版TOTOドローイングカレンダー

プレゼント

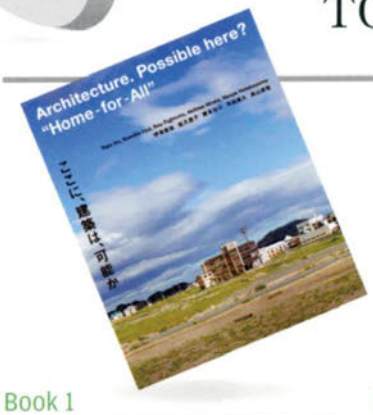
同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

TOTOからのお知らせページです。
イベント、新商品、最新情報など
知っておいていただくと
お役に立つ情報を心がけています。
合わせてご注目ください。

B Book

TOTO出版

TOTO出版のお知らせ



Book 1

『ここに、建築は、可能か』

本書では、第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展（2012年開催）で金獅子賞を受賞した日本館の展示記録とともに、陸前高田に建てられた「みんなの家」を紹介します。東日本大震災の被災地に3人の個性的な若手建築家がどのようなプロセスで協同設計をしたのか？　コミッショナーの伊東豊雄氏の真意とはなんだったのか？　畠山直哉氏の写真と2回の座談会によってその全容を伝えます。

※表紙デザインは変更することがあります。

Book 2

『重奏する建築――文化／歴史／自然のかなたに建築を想う』

建築家としての活動の場を京都におき、30年にわたって建築と正面から向き合い、作品をつくりつづけてきた岸和郎氏が、今あらためて「建築とは何か」を問う渾身の一冊。今まさに建築家を目指している若者や、もう一度建築を学びたいと考える社会人へ贈る、岸和郎氏からのメッセージです。

●著者／岸 和郎
●定価／1,890円（1,800円+税）
●体裁／四六判、ソフトカバー、336ページ

Book 3

『Tomorrow――建築の冒険』

土を構造体にした「アース・ブリックス」や、1,000万円台で建築家と住宅をつくる仕組み「Project1000」など、従来の建築家の枠組みにとらわれない多彩な活動を続けている建築家・山下保博氏とアトリエ・天工人（てくと）。本書は、その幅広い活動の全体像を2部構成で明らかにしていきます。

●著者／山下保博×アトリエ　天工人
●定価／2,100円（2,000円+税）
●体裁／四六判、ソフトカバー、272ページ

プレゼント

Present

同封の「TOTO通信アンケート」にお答えいただいた方のなかから、抽選で10名の方にプレゼントいたします。

『ここに、建築は、可能か』

●著者／伊東豊雄、乾久美子、藤本壮介、平田晃久、畠山直哉
●定価／2,310円（2,200円+税）
●体裁／B5判変型（210×168㎜）、ソフトカバー、184ページ、和英併記
●発行日／2013年1月22日

www.toto.co.jp/publishing

C cera trading news

CERA TRADING

セラのお知らせ

東京・乃木坂のショールームリニューアルオープン！

セラトレーディングショールームは、「Feel×Experience」のテーマのもと、全面リニューアルオープンいたしました。
ミラノの邸宅をイメージした展示や、人気のオーバーヘッドシャワーの通水展示など、今まで以上に海外の水まわりに触れて感じていただけるほか、打ち合わせコーナーもご用意しております。
リニューアルオープンを記念し、2013年3月31日までの期間限定で、日曜日もオープンいたしますので、この機会にぜひご来館ください。

プレゼンテーションステージ 1F

テラスラウンジ BF1

●営業時間／10:00～17:00（営業時間が変更となります）
●休館日（3月31日まで）／月曜日　祝日　年末年始　夏期休暇（3月31日以降の休館日に関しては、お問い合わせください）

www.cera.co.jp

セラトレーディング

cera trading

●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル 1階　地下1階
●電話／03（3402）7134
●営業時間／10:00～17:00
●定休日（3月31日まで）／月曜日　祝日　夏期休暇　年末年始

Bookshop TOTO

Bookshop TOTO

●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03（3402）1525
●定休日／日曜日　月曜日　祝日・「TOTOギャラリー　間」休館中の土曜日　夏期休暇　年末年始

TOTO出版

TOTO Publishing

●所在地／東京都港区南青山1-24-3 TOTO乃木坂ビル2階
●電話／03（3402）7138
●ファクス／03（3402）7187
全国の書店でお求めください。直営店Bookshop TOTOでもお求めになれます。書店遠隔の方はお問い合わせください。

アクセス／●東京メトロ千代田線「乃木坂」駅下車3番出口徒歩1分　●都営地下鉄大江戸線「六本木」駅下車徒歩6分　●東京メトロ日比谷線「六本木」駅下車徒歩7分　●東京メトロ銀座線　半蔵門線　都営地下鉄大江戸線「青山一丁目」駅下車徒歩7分

次号『TOTO通信』は2013年4月上旬発行の予定です。

TOTO通信 2013年 新春号

TOTO通信 2013年 新春号 第57巻 第1号 通巻498号
発行日:2013年1月1日 発行所:TOTO株式会社 メディア推進部
〒154-8540 東京都世田谷区桜新町2-24-2 TEL.03(5451)1131

TOTO GREEN CHALLENGE

あしたを、ちがう「まいにち」に。
TOTO

おふろでくつろぎサンジュウマル

sazana

サザナ

足もとにマル!

浴び心地にマル!

ぬくもりにマル!

商品についての技術的なお問い合わせ TEL.0570-01-1010 受付時間:平日9:00〜18:00、土曜日9:00〜17:00(日・祝日、夏期休暇、年末年始休暇を除く) URL:www.com-et.com

VEGETABLE OIL INK
この情報誌には植林木・竹材認証材などを原材料とする環境に配慮した用紙、ならびに印刷インキ工業連合会認定の植物油インキを主に使用しています。

TOTO通信のお届け先などの変更はお客さまNo.(封筒の宛て名ラベル右上に記載)も併せて下記までご連絡ください。
TOTOカタログセンター内 TOTO通信データ管理室TEL.093(563)2055 FAX.093(571)0999
*当社ならびに当社グループ会社は、個人情報の保護を社会的責務と考えます。お客さまからお預かりした個人情報は、関連法令および社内諸規定に基づき慎重かつ適切に取り扱います。詳細はTOTOウェブサイト(www.toto.co.jp/)をご覧ください。

8163